

## 芭蕉連句の「季の句」

## ―季語の推移と表現の変化―

野村 亞住<sup>a</sup><sup>a</sup> 湘北短期大学

## 【キーワード】

芭蕉 連句 季語 季の句 雑の句 季移り 季重なり かるみ

## はじめに

日本における美意識の根底には、常に、季節折々の美しさと、その移ろいによる儂さの存在、そして、巡る季節へ寄せる思いがある。「雪月花」「花鳥風月」などに代表される四季の景物は、物語や詩歌の伝統を積み重ねつつ、その余情を深めてきた。それらは、とりわけ和歌・連歌など短詩型文学において季節の題として重要視され、やがて固有の本意を持つ「季節のことば」として、繰り返し詠出の対象とされてきた。俳諧では、その対象が日常世界にまで拡大され、生活の諸相にまで季節が見いだされてくる。こうして「季節」「季語」は、伝統に根ざした本意と、作者の実感との相克を孕んで、一句の句意をも左右する重要な要素となったのである。

芭蕉の季語に対する考えは、『三冊子』や『去来抄』の記述などをもとに、新たな季語の発掘や季語に関する柔軟な態度が喧伝されてきた。従来の季語の研究は、こうした俳論の記述や季寄せ・歳時

記の調査を中心に行われ、また、部立や前書・題などを特定しやすいこともあって、もっぱら発句を対象として行われてきた。そのため、連句の季語についても、発句での扱いを援用する形で片付けられ、「連句季語」(以下、発句の季語と区別して連句で使用された季語を「連句季語」と仮称する)の扱いという側面は見落とされてきたのである<sup>(1)</sup>。だが、いうまでもなく、殊に芭蕉たちの時代においては、俳諧の中心は連句にあった。連句は、人情・世態・風俗の諸相を詠み込むことで付合世界を展開させている。こうした連句の形態が、連句季語を多種多様なものとするだろうことは想像に難くない。そこに使用される季語のバリエーションは自ずから多く、伝統的な季題から日常的な事象における季節の表象にいたるまで、発句とは異なる多様な季語体系が連句には想定されるのである。その意味で、発句の季語とはまた別の形で連句季語について考えねばなるまい。

そこで、本稿では連句季語の実態調査にもとづいて、連句における季節の扱いの分析を試みた。そこには、連句ならではの季の扱いや季語の傾向、時期的変遷など、連句季語の詠まれ方が見て取れる。こうした連句での扱いに関して、使用された季語の様相と変化、表現方法の特徴を含め、以下四章に分けて考察していきたい。

なお、調査にあたっての詳細は稿末に示したが、今回は歌仙形式が一般化し、いわゆる蕉門の確立とされる貞享元年『冬の日』以降の芭蕉連句の季語の扱い方を明らかにすべく、使用された季語の傾向と特徴、その実態を、貞享以前の連句や芭蕉発句との比較を視野に入れて分析を行った。季の認定に関しては、『校本芭蕉全集』や『芭蕉連句抄』『芭蕉連句全註解』など、先行する諸注釈を参考に、当時の季寄せ・歳時記類との対照や、当時の用例や式目との関連、連句の季の扱いなどをふまえて、一つ一つ検討した結果、諸説に対して訂正を施し、私にふさわしく改めたものがある。

表①季語の集計

連句上位 (貞享)	発句上位	貞享以前連句
月 13 (13) 有明月 25 花 25 (5) 26 秋 11 (11) 春 15 (15) 雪 16 (16) 露 82 (82) 霞・霞む 29 かげろふ 28 (1) 冬 27 (2) 砧 24 (24) 霧 24 (24) ほととぎす 23 (2) 鶯 22 (1) 蝶 22 (1) 時雨 21 (7) 霜 21 (5) 霰 19 (4) のどか 19 (4) すずき 18 (4) 寒し 18 (4) 萩 15 (2) 雁 14 (1) 柳 14 (4) 夏 13 (4) 盆 13 (4) 雉子 14 あたか 11 虫 11 きりぎりす 10 (3) 稲妻 10 (1) 稲雀 10 (2) 栗 10 (1)	月 77 十六夜 5 花 53 雪 43 梅 31 菊 30 ほととぎす 26 秋 22 秋風 22 暮秋 11 五月雨 18 桜 16 時雨 16 時雨る 5 霜 15 柳 12 15 寒し 11 涼し 11 夕涼み 5 露 11 瓜 9 萩 9 夏の月 5 夏 8 霰 8 きりぎりす 7 蛭 7 師走 7 七夕 7 春雨 7 朝顔 7 蝶 7 落葉 7 こがらし 6 雲雀 6 冬 5 冬籠り 6 麦 6	月 120 (1) 有明月 4 花 74 (3) 秋 64 露 53 春 46 霞 21 時雪 18 (1) 雪 13 (1) 雁 10 (1) 霧 10 霜 9 ほととぎす 9 柳 9 薄 8 鶯 7 萩 7 藤 6 虫 6 紅葉 5 朝顔 5 (2) 梅 4 鯉 4 蛙 4 砧 4 木枯らし 4 清水 4 歳暮 4 (3) 蛭 4

・季語の分類は、季語の本季で用いられたものを右記の大分類に当てはめている。よって、「雪」であれば、「初雪」「雪見」などは含むが、「春の雪にあたる「淡雪」や「雪解」などは含まない。

・( )内の数は連句の発句で詠み込まれた数。なお、季語の本季を、春夏秋冬で色を変えて示した。季重りは全ての季語を集計した。

一、使用された季語の概観

上段に示した表①は、貞享元年『冬の日』以降の芭蕉一座の連句に用いられた季語、貞享期以前の芭蕉の一座した連句における季語のうち、連句において上位に挙げられた季語と、芭蕉発句において多く用いられた季語の、集計上位を占めるものである<sup>(2)</sup>。

(1) 発句・連句

およそ一〇〇〇句あるとされる芭蕉発句において、その総数が異なるため、連句季語との分布に関してはその数を一概には比較できないが、上位に挙げられる季語の種類は連句季語と似通っているように見える。表①を見れば、発句の季語上位には「月」「花」「雪」「梅」「菊」「ほととぎす」など、伝統的な季題が並ぶ。とりわけ、発句の季語には、季節の風物詩である植物名(花の名)が多く見られるのが特徴的である。それに対して、連句季語では、「雪」「露」「霞」「時雨」「かげろふ」などの気象に関わる季語が特徴的である。さらに細かく見てみると、そこに詠まれた季語にはいくつか特徴が見いだせる。まずは、連句季語と比較しながら発句・連句双方の季語の特徴をまとめることから始めたい。

発句では、景物、とくに「梅」「菊」「桜」「柳」などの植物が多い。また、「雪」「霜」「時雨」「霰」「こがらし」や「五月雨」「春雨」などの気象に関わるもの、なかでも冬の気象に関わるものが多く見られる。総じて、四季折々の風物詩が多く詠み込まれており、和歌・連歌以来の伝統的なものが多いことがわかる。それに対し、連句には季節名が四季を問わず多く、「寒し」などの寒暖の感覚をあらわす季語が多く見られる。

季語の本季を見てみると、発句では四季の偏りがあまりないのに

対して、連句では春・秋の季語に偏っている。これは季の式目の関連で春・秋の季語が自ずから多くなるためである。だが、それでも「雪」「冬」「時雨」「霜」「霰」「寒し」など冬の季語が上位に多く見られるのに対して、夏の季語は「ほととぎす」と「夏」という季節名に限られていることは注目できる。さらに、発句で上位に見られた「五月雨」や「涼し」「瓜」「螢」「麦」「蟬」などの夏の季語は連句においては上位に挙げられていない。これは、詠み込まれた数の少ない夏の季語においても同様の傾向である。総じて、発句に比して連句では、夏の季語のバリエーションが少ないことも特徴といえよう。

一方、連句の上位に挙げられていた「盆」や「のどか」「雉子」「稲」「栗」などは、発句の上位にはなく、いずれも数例見られるだけである。これらは、春・秋の句数の多さに関連したバリエーションの多さと考えられる、連句特有の頻出季語であると言えるだろう。さらに、こうした連句において、とりわけ多く詠み込まれた季語を見てみると、「露」「霞」「霧」「霜」などが挙げられる。これらは、秋の霧と春の霞の読み替えや、月光の露と実際の露などのように語の持つ多義性が認識されていたもの、また、気象など本季と実際の季感に幅があるものである。こうした読み替えのしやすい季語が、連句にはより多く用いられたということがわかる。

## (2) 連句における頻出季語

季語には、このように連句に特徴的なものと発句に特徴的なものというように、使用頻度においてもバリエーションにおいても差異が見られる。こうした特徴をもとに、表①からは以下のような連句季語の特徴が見いだせる。

なかでも、上位に挙げられる季語は芭蕉連句において何度も使用

された頻出季語として、その扱いが注目される。連句最上位には「月」「花」が挙げられるわけだが、連句における「月」「花」は定座の関係から、一定数詠まれる必要があり、読み込み方の意識が異なる。そのため、数を一概に比較することはできない。だが、一般に連句での「月」「花」について「二花三月」と言われるように、その比率が二対三になっていることが確認できる。これは、芭蕉の擲きが、いかに、連句での形式を固定させたものであったか、また、いかに式目を遵守していたかを物語る数値である。

この「月」「花」を筆頭に、貞享以降の連句集計上位には、「秋」「春」など季節名が並ぶ。第一に、この季節名についてまとめておこう。

## 〈季節名〉

「秋」一八〇例、「春」一六五例、「冬」二七例、「夏」一三例。「秋」次いで「春」が多いのは、句数の関係で当然の結果ではある。「冬」は二七例で、「夏」は一三例と少ない。一方、発句では、「秋」が突出して多く詠み込まれる。次に「春」、「夏」、「冬」の順である。連句では「夏」が最も少なかったが、発句では「冬」の方が少ないという特徴がある。季節名を詠み込んだ句に関しては、章を改めて分析する。

こうした季節名の次に多く見られるのが、「雪」「霞」「かげろふ」や「砧」「霧」「時鳥」「鶯」「蝶」「時雨」「霜」などの伝統的な季題である。連句において詠句の対照を日常卑近な題材に広げてはいても、こうした伝統的な季題が上位に挙げられることは興味深い。季語の持つ季感を利用した季の句の展開の仕方を物語るものとして注目されるわけだが、こうした季語と季の句との考察については後述するものとする。殊に、貞享以前の連句季語にはこうした伝統題が多く、季節の展開において季語の優位性が注目されるものである。このような季語の使用には、時期的変遷が大きく関わってき

そうである。この点を含め時期的な傾向については次章で詳しく検討したい。

ところで、貞享以降の集計には、「寒し」「あたたか」などの寒暖の感覚を示す季語が見える。連句季語の特徴の第二には、この寒暖の感覚に関わる季語の扱いが挙げられる。発句においても「寒し」「涼し」が上位にある。実は、寒暖の感覚は、季節の表現としてバリエーション豊かに詠み込まれた季語である。「寒し」や「涼し」など固定化された表現のみならず、「うそ寒」「やや寒」などの秋における寒しのバリエーションなど、季節の感覚表現は細分化され、様々な形で詠み込まれている。そのため数としてはまとまりが見えないが、感覚表現のバリエーションとして寒暖の感覚をまとめておきたい。

〈寒暖の感覚〉

「寒し」が一八例と多い。次いで「あたたか」一一例、「涼し」「やや寒」「肌寒」八例、「冴ゆ」五例、「ひややか」「暑し」四例、「すさまじ」「身にしむ」三例。「うそ寒」二例。

春の季語「あたたか」よりも、冬の季語「寒し」が多いのは興味深い。また、「寒し」は、冬の句だけでなく、「やや寒」「肌寒」「うそ寒」など、秋の季語としても用いられているが、こうした感覚は、季節の移り変わりをよく表現する語として、四季折々の「変化」が詠み込まれる連句において用いやすかったことを示していよう。また、寒暖の感覚は季移りにおいて多用されており<sup>③</sup>、感覚であるために他の季節と共に用いられやすく、さらに、「寒し」ならば、空虚感・冷たさ・緊張感、「あたたか」ならば、幸福感・満足感・倦怠感などといった心情表現とも結びつくことで、転じの面でも用いやすいのである。また、他の季節と共に詠み込まれるとその「季節」とのギャップを示すことで、句中の世界の実感が増し、より共感の得られる句作となる。

以下は、連句特有の用いられ方をする季語である。季節の展開において、雑の句を挟むことなく、季の句から直接他季へ移行する「季移り」の付合において多く用いられる季語は、とりわけ、連句のルールや連句の形態に即したものと見える。その意味では、最も連句特有の季語であり、連句特有の扱われ方があるものとして、注意しなければならぬだろう。

〈季移りに多く用いられる季語〉

「霧」「露」「霜」「ほととぎす」「雪」、寒暖の感覚。

これらは、連句特有の扱われ方をする語であり、季語の持つ実際の季節としての幅や（「雪」ならば晩秋から初春など）、季語以外の意味、比喩的な用いられ方（「露」ならば儂さなど）、類似する語との見替え（たとえば、秋の「霧」と春の「霞」など、多義性によって、連句に特徴的に多く用いられる。特に、初裏の花前に用いられるため、秋の季語が多い。「露」「霧」が集計上位に挙げられるのは、花前での季移りに際して多く用いられるためである。

〈連句の発句に多く用いられる季語〉

「瓜」「桜」「牡丹」「柳」「時雨」。

芭蕉発句においても同様の傾向がある。つまり、これらの季語は、いずれも平句ではなく、発句に用いられやすい季語といえる。

〈挙句に多く用いられる季語〉

「藤」「かげろふ」「霞む」「柳」「燕」。

挙句の詠み方の特色に適しているという認識が強い季語といえる。芭蕉発句では、これらの季語は少なく、連句での特色でもある。

この他、数のまとまりは見られないものの、その傾向を特筆すべきものとして「月名」「節句」に関わる季語をまとめておく。これらは、先に挙げた「四季名」の季語同様、連句で特徴的に用いられる季語である。

## 〔月名〕

「師走」「弥生」九例、「如月」「水無月」五例、「正月」「五月」三例、「卯月」二例。

連句では「月」との兼ね合い（「月」と月次の月は三句去）から、一見詠まれないものかと思われるが、意外にも、比較的多く詠み込まれている。発句では「師走」が特に多く、「弥生」は全く詠み込まれていない。発句において、他の月名はほとんど見られず、「師走」に集中しているわけだ。そうした意味で、連句においてこれだけのバリエーションが見られるということは、「月名」の季語が、連句においてよく詠み込まれる素材といえる。

## 〔節句・日など〕

「七夕」四例、「子日」三例、「節分」一例。

発句においても「七夕」は多く詠まれる。節句の中でも「七夕」「子日」の二者が突出しているが、いわれがわかりやすく、物語性が強いいため、句作しやすかったと考えられる。発句では、こうした節句や時候に関わる語が題として多く詠まれたり、句中に詠み込まれる傾向があるが、連句にはあまり詠み込まれないようである。常に付合世界での解釈を要求される連句においては、時節が限定されすぎするため、付句への展開という観点から自然と避けられたのであろう。「七夕」（秋）、「子日」（春）はそれぞれ春・秋の季語であり、両者とも春・秋の一句目に用いられている。前句に恋句が多いのも共通点である。これは、「七夕」「子日」の背景が影響し、恋の転じを主眼に置くことで、句の展開に変化を持たせる効果をねらったものと考えられる。

## (3) 貞享以前・以後

表①の最下段には、貞享以前の連句季語の集計上位を示してある。それを見れば、貞享以前で多く詠み込まれていたのは、春・秋では季節名と「霞」「柳」「鶯」「藤」「露」「雁」「霧」「薄」などの伝統的な季題である。とりわけ、貞享以前の連句において、「露」が非常に多く用いられていたことがその数の多さからわかる。連句の発句で用いられることもなければ、詠み込まれた場所に偏りはとくに見いだせない。だが、注目すべきは「露」全五三例が三二巻（寛文・延宝二五巻・天和七巻）の連句に用いられているという点である。これは、「露」が一卷の中で繰り返し使用される季語であったことを意味している<sup>(4)</sup>。しかも、歌仙形式・百韻形式に関わらず、複数回詠まれているのである。その意味で「露」とは、貞享以前の連句において、最も常套的な秋の季語であったということができる。こうした「露」の扱いは『冬の日』以降の連句において見られなくなる。一卷に繰り返し使用されたのは二巻のみで、残りの五七巻においては、複数回使用されることがない。言い換えれば、貞享以降の連句は、一卷で繰り返し使用することを避けたために、秋の季語のバリエーションが増えたと推察できる。

また、貞享以前の冬の季語では、「雪」「時雨」「霜」の数が一樣に多く詠み込まれている。その意味で、貞享以降の連句において、冬の季語として「雪」がいかに集中して用いられていたかがわかる。「雪」は連句全体で一〇六例（貞享以前・八八／貞享以降・一八）、発句で四三例と連句でも発句でも多く詠み込まれている季語である。連句には、春・秋の句数が関係するため、連句で詠まれた季語の上位に、秋や春を本季に持つ季語が多いのが当然なのだが、その中で冬を本季に持つ「雪」が、「月」「花」「春」「秋」に次いで多く詠まれた季語であったことは重視しなければならない<sup>(5)</sup>。

貞享以前の連句において、伝統的な季題が多く見られるのは、夏・冬でも同様である。だが、その内実を見てみると、夏・冬ともに季節名が上位に見られない。夏の季語では「ほととぎす」が両者に共通して多く用いられているが、貞享以降に「鯉」や「清水」といった季語が上位に見られず、代わって「夏」という季節名が多く詠まれたというのも特徴として挙げられる。貞享以前と以後では、とりわけ夏・冬において、そのバリエーションが、伝統的季題を詠み込むということから、たとえば、「冬の朝」や「夏の上」などのように、季節名を冠することでさまざまな季節の詞として機能させていくという季語の用い方に変容している<sup>6)</sup>。

以上概観してきたように、表①を一覧して、量的観点から特徴づけられる季語などはわかりやすい。だが、一見その差異の見えづらいう発句・連句双方に同じように多く用いられるような、代表的な季語はどうだろうか。実は、貞享以降、二〇例以上詠まれた季語について見てみると、和歌以来の伝統的な季題が多く、発句や貞享以前とさほど変わりはない。しかしながら、個別に見てみると、「露」や「雪」「蝶」などは、時期を問わず多く用いられたものであるが、「霧」「砧」などは貞享期を中心に用いられた季語である。それに対して、「かげろふ」「鶯」「時雨」「霜」などは元禄三年以降、晩年にかけて多く用いられている。これは「春」「夏」「秋」「冬」という四季名も同様である。このように、時期によって季語の使用には偏りが見られる。「風狂」の志向や季移りの付合が頻出するなど、季の混み合った貞享期の作風から、人事句に重きが置かれ「かるみ」の志向が指摘される晩年にかけての作風の変化が、季語の使用に影響を与えているとも考えられる。一句における表現の問題を含め、こうした連句季語の時代的変遷に関しては、以下、章を改めて見ていきたい。

## 二、季語の時代的変遷

芭蕉が一座した連句は、およそ二一〇巻、七六〇〇句ある。そのうち、季の句は五一・四%に相当する、三九〇〇句ほど詠まれている。時代ごとの分布を大まかに見てみると、『冬の日』以降の連句が、季の句は三〇・五〇句ほどで五三%、それ以前では八六〇句ほどで四六%となっている。

### (一) 季句の割合

次頁上段の表②は、貞享元年『冬の日』以降の芭蕉一座の連句を、連衆・地域などで傾向の異なる可能性を考え、便宜的に興行地域を踏まえて八期に分類し、その中での季の句の割合を示したものである。なお、参考として貞享以前の連句の季の割合、また芭蕉発句の四季句数を示してある。貞享以前の連句においては、百韻形式が多く、季の比率を同様に比較できないため、ここでは参考として考えておく。以下、この八区分にもとづいて、時代的な傾向や連衆の嗜好など、その様相を明らかにしていきたい。

次頁の表を参照されたい。この表②からは、総句数に占める季の句の総数(以下、季句数とする)の割合は時代の経過につれて緩やかな減少傾向にあることがわかる。五割五分から六割で推移していた季句の割合が、第五期を境に、第六期、第七期と減少し第八期には五割強にまで減少している。この一〇%の減少は、季の式目と配列の観点から考えて、見逃せない増減であるといえる。そもそも、歌仙一巻では発句・脇、初表五句目の月の定座を中心に秋三句、初裏には月の句・花の定座関連の秋・春の六句、名残表十一句目の月の定座関連で三句、名残裏には花の定座関連で二句と、春・秋を中心に季句が十六句は必要である。これに通常夏・冬が加わるため、

表②芭蕉一座の連句における時代別季句数

※（）内は、総句数における割合。

時代	時期	場所・旅	総句数	季句数(%)	春(%)	夏(%)	秋(%)	冬(%)
第一期	貞享元年『冬の日』～	「野ざらし紀行」	402	223(55.5)	74(18.4)	28(7.0)	86(21.4)	35( 8.7)
第二期	貞享二年五月～	江戸	478	260(54.4)	75(15.7)	43(9.0)	104(21.8)	38( 7.9)
第三期	貞享四年十一月～	「笈の小文」「更科紀行」	625	378(60.5)	132(21.2)	37(5.9)	127(20.3)	82(13.1)
第四期	元禄元年九月～	江戸	318	173(55.4)	57(17.9)	20(6.3)	69(21.7)	26( 8.1)
第五期	元禄二年四月～	「おくのほそ道」	736	387(52.6)	114(15.5)	58(7.9)	176(23.9)	39( 5.3)
第六期	元禄二年九月下旬～	京都・近江・伊賀	996	513(51.5)	171(17.1)	50(5.0)	230(23.1)	62( 6.2)
第七期	元禄四年十一月～	江戸	1276	683(53.5)	222(17.4)	80(6.3)	280(21.9)	101( 7.9)
第八期	元禄七年五月～十月	最後の旅	898	453(50.4)	131(14.6)	65(7.2)	199(22.2)	58( 6.5)
貞享以前	寛文・延宝年間		1216	537(44.7)	176(14.5)	33(2.7)	276(22.7)	52( 4.3)
	天和～貞享元年		652	325(49.8)	95(14.6)	39(6.0)	143(21.9)	48( 7.4)

※【芭蕉発句】総句数：983 春：243 夏：238 秋：301 冬：195 雑（無季）：6（月花4・名所2）

発句の季の内訳は雲英末雄・佐藤勝明校注『芭蕉全発句』による。

歌仙において通常、季句は十八（二〇）句。つまり、五〇（五五）%存在することになる（事実、貞享以降の芭蕉連句における季の割合の平均は五三%である）。このことを考えると、貞享期は五五%前後から、第三期にいたっては六〇・五%と、この時期の季句の割合の高さが窺われる。また、最晩年の元禄七年、五〇%強という数値は、この時期いかに雑の句を中心に展開して、季句が最低限しか詠まれていなかっただかを顕わに物語る数値といえよう。時代の経過と共に減少傾向を示すのは、季句中心の句の展開

へと、連句の傾向が推移した結果と考えられる。

さらに、細かく四季分布を見てみると、発句に当季を詠み込むため、興行時節にともなって季の割合が変化していることがわかる。たとえば、第一期・第四期において冬の割合が高いのは、冬発句の興行が多いためであり、第五期の夏の割合が高いのも、同様の理由である。第三期における季の割合の高さは、他の時期に比べて、冬の句と春の句の割合の多さに起因していると考えられる。先にも記したが、季の式目と定座の関連で春・秋の句の割合が高いのは当然の結果である。秋の句数が二二%前後で推移しているのに対し、春の句は変動が激しいもの、およそ一七%前後である。「二花三月」といわれるように、秋を本季とする月の句数の関係で、秋の句数が春の句数を上回るのは想像に難くない。だが、第三期は、春の割合が秋よりも高いという興味深い結果が出ている。また、第二期・第四期第七期は江戸での連句である。この三者（なかでも四期と七期）の季の割合が類似していることも、江戸の連衆における季の展開への嗜好がかいま見えるようで興味深い。最晩年の第八期は、とりわけ春の割合が低い。作風の時期的傾向を見るうえで、興行場所と一座した連衆の問題に間して留意する必要がある。

## （2）各時期の季語の様相

芭蕉連句における季語の割合は、元禄二年「おくのほそ道」の旅を境に大きく変化している。季語の割合の高い貞享期は、季の句を中心に連句が展開され、それとは対照的に、とりわけ第七期・第八期の晩年は、雑の句が連句の中心となる。稿末には、附表として時期別に季語を集計し、その一覧を示してある。それをふまえて、さらに詳しく時代ごとの季語の変化を見ていこう。

第一期

第一期は「野ざらし紀行」の旅中である。この時期、季句の割合が五五・五%と高く、総句数における四季句の比率は、春一八・四%、夏七・四%、秋二一・四%、冬八・七%であって、他の時期に比べて冬の句を詠む割合が高い。この時期の連句、全二一卷(名古屋六、熱田四、鳴海一)中、用いられた季語のバリエーションは比較的少ない。上位に挙げられるのは、「秋」「霧」「春」「霞」「寒し」「雪」などで、これらが大多数を占める。なかには、次のように、

樽火にあぶるかれはらの松

荷兮(冬)

とくさ苺下着に髪をちやせんして

重五(秋)

「かれはら」「とくさ苺」などの季語や「茶の実」「海鼠」など、表現が凝った言葉の使用も見られるものの、全体的には秋や春の季節名その他、「霧」や「露」など常套的で伝統的な季語の使用が目立つ。第一期の連句は、「風狂」の志向や趣向があった句の展開や季移りの多用など、その作風が指摘されるところである。たとえば、

ひとの粧ひを鏡磨寒

荷兮(冬)

花棘馬骨の霜に咲かへり

杜国(冬)

(貞享元年「炭売の」歌仙、脇・第三「冬の日」) 右のように、趣向があった句作りが窺われるわけであるが、右の句では一句の季を決定しているのは「寒」・「霜」(返り花)などの伝統的な季語であることがわかる。同様に、

有明の主水に酒屋つくらせて

荷兮(秋)

かしらの露をふるふあかむま

重五(秋)

(貞享元年「狂句こがらしの」歌仙、第三・初オ4「冬の日」) 「有明の主水」や「かしらの露」「あかむま」など、趣向があった表現で構成される右の付合。だが、その中で使用された季語に注目す

ると、「有明(月)」と「露」という、極めてオーソドックスな季語であることに気づく。このように第一期の季語には伝統的なものが多く、その意味で、季語は他の句中の言葉のように、一句の趣向の一つとして詠み込まれたわけではない。むしろ一句に季節を添える役割として、季節の決定を主眼に詠み込まれているといえよう。また、

霜にまだ見る薺の食

杜国(冬)

野菊までたづぬる蝶の羽おれて

芭蕉(秋)

(貞享元年「はつ雪の」歌仙、脇・第三「冬の日」) 「霜」(冬)「薺」(秋)・「野菊」(秋)「蝶」(春)というように、複数の季語を同時に詠み込む、いわゆる「季重なり」となった句も多く見られるのもこの時期の特徴である。こうした句が、季移りの付合に用いられることもまた、注意すべきであろう。句中に複数の季語が存在したことによって、一句の季節感がぼかされ、付合世界における季節も曖昧なものとなる。そこに描き出されるのは、季節と季節との合間の微細な季節感であったり、季節の移ろいであったりする。季語を重ねることによって新しい季節感が創造されるのである。しかしながら、「はつ雪の」歌仙の例は、付合世界の構成要素には、「薺」と「野菊」という秋の季語が存在している。付合における同じ季節の共有によって季節の展開が図られていた。こうして、季語はあくまで季節の展開に際して季節を決定する道具として扱われているのである。貞享以前の連句以来第一期においても、伝統的な季語が多かったのも、季語を詠み込むことよりも、季節の展開の方が主眼であったためで、そこに季語の持つ季節感が巧みに利用されていると見ることができる。趣向があった句が特色である貞享期。その第一期にあつては、季語のあたりしみに主眼が置かれたのではなく、むしろ季以外の表現の趣向が模索された、と考えられよう。



## 第二期

貞享期江戸滞在中の第二期は、季句の割合が五四・四％と依然高い。総句数における四季句の比率は、春一五・七％、夏九・〇％、秋二一・八％、冬七・九％となっており、全時期を通して最も夏の割合が高い時期である。また、春の割合も他の貞享期に比して低いのが特徴的だ。この時期、夏発句が一、秋二、春四、冬五巻と、春と冬発句の連句が多い。その中で春の割合が低く、夏の割合が高いのは、この時期の特色ともいえる。使用された季語は、依然として伝統的な季語が上位を占めるものの、二例・三例の季語、一例の季語が増え、一期に比べて季語の偏りが小さい。つまり、第一期に比すると、季語のバリエーションが増える傾向にある。たとえば、

松風のはかた箱崎露けくて

嵐雪(秋)

酒店の秋を障子あかるき

其角(秋)

社日来にけり尋常の煤はくや

才丸(秋)

舞ふ蝶仰ぐ我にしたしく

コ斎(春)

(貞享二年六月二日「涼しさの」百韻、第三初オ6)

棒の月一の窓に僧瘦て

露沾(秋)

洪つき染し裏の藪かけ

沾荷(秋)

みみづくの己が砧や鳴ぬらん

芭蕉(秋)

(貞享三年「蜻蛉の」半歌仙、初ウ9～11)

その中には、右に示したように「社日」や「洪つき」、また「順の峰」「引板」など他の時期に見られないような季語が並ぶ。しかも、才丸の「社日」の句は秋の三句目、沾荷の「洪つき」の句は、秋の二句目の句として、季の式目の中で明らかに秋句であると提示しながら季語が選り取られていたことがわかる。さらに、その他にも「冬のこしらへ」などと季節をずらす表現や歳暮や新年に関わる「年とる物」や「去年」「今年」などの言葉、「わくら葉」「ハツ手の花」などの植物

に関する言葉、また「立初る虹」など、言葉としては雅語表現ではあるが、表現が工夫され、新たな着眼点のもと、リアリティーを追求した季節感を詠み込んでいるのである。

たとえば、次に示した「涼しさの」百韻の清風句は、前句・後句ともに春であり、句数の規定からこの句も春の句でなければならぬ。しかしながら、当時の季寄せ類を参照しても一句には季語として既出のものはない。

飴して修理する船の春となり

素堂(春)

立初る虹の岩をいろどる

清風(春)

きれだこに乳人が魂は空に飛

芭蕉(春)

(貞享二年六月二日「涼しさの」百韻、名オ1～3) おそらく、この句の中で季として機能しているのは、「立初る虹」であろう。この「立初る虹」とは、「初虹」のことと考えられる。「初虹」は『袖かがみ』(延享元年)に二月として所出、『曲尺』(明和八年)『三潮草』(文化三年)に至って「虹初めて見ゆ」として三月の季語として定着している。最も早い記述としては『滑稽雑談』(正徳三年)に「月令曰、季春之月、虹初見。(中略)これを初虹など云て春也」とある。『滑稽雑談』に先立って、「初虹」に春の季感を見て、季語として用いた例といえよう。つまり、この「涼しさの」百韻の例は、季寄せ・歳時記類に先行して季節の表現が詠み込まれたものであるということが出来る。このように、第二期は、総じて、季語のバラエティーに富み、新しい季節感の表現を模索している様が見て取れる時期だと評せよう。

## 第三期

第三期は、江戸を出て「笈の小文」・「更科紀行」の旅中で巻かれた連句である。この巻の連句は、尾張で二二巻(名古屋五、熱田六、鳴海一)その他三巻(大津一、岐阜二)がある。この時期、最も季

句の割合が高く、六〇・五％にのぼる。総句数における四季句の比

率は、春二一・二％、夏五・九％、秋二〇・三％、冬二一・一％で、春と冬の割合が最も高い。それに対して、夏の割合が低いのが特徴的である。冬の割合が高いのは、この時期の連句の大多数が冬発句で始まるためと考えられる（冬発句が一三、秋四、夏・春三と、旅程の関係から冬の句が多く詠まれたことが推察される）。冬の割合が一三％ということとは、一卷に冬が四〜五句詠まれたことになる。春・秋の句数は季の式目の関連で下限が決まっているといっても過言ではない。発句・脇は同季でなければならぬので、冬発句から始まる連句では、表六句ですでに二句〜三句詠まれることになる。これに、平句の間に一〜二句、詠み込んだ計算になる。とするならば、自然と夏の句を避けることで、季の割合の調整をとったのであろう。それにしても、季句がこれほど多く詠まれた時期は、他にはない。季の句の割合が高いことには、この時期、季移りの付合が頻出したことが影響していると考えられる<sup>(7)</sup>。第一期・第三期・第五期は、ともに旅中であるが、こうした時期に季移りの付合が多く、季を集中させる傾向があったことは、注目できる結果であろう。使用された季語を見れば、常套的な季語の使用も見えるが、一例のみの季語が多いことから、使用された季語のバリエーションの豊富さが窺われる。なかでも、第二期と同じく「青蔦」「埋火」「蝸牛」「連翹」など、用いる季語の多様さが特徴的であり、かつ、右の美言句のように「午時の花」などとその表現が工夫されていることも注意しておきたい。

菓の戸に乳を呑ほどの子を守て

自笑

もぎつくしたる午時の花

美言(夏)

山路来て何やら床し郭公

如風(夏)

この他にも、「藻の花」「柿の蒂」など植物に関わる季語のバリエーションなどが興味深い。

おぼろのかぐみ価百銭

芭蕉(春)

具足きて春のなごりを惜けり

鏡鶏(春)

(貞享四年冬「露凍て」歌仙未満二四句、初ウ6・7)

明やすき夜をますらが腹立て

荷兮(夏)

なにを鳴行ほと、ぎすやら

芭蕉(夏)

(元禄元年七月二十日「粟稗に」歌仙、名ウ3・4)

こうした表現の工夫という観点では、帰雁を意味する「雁のなごり」という言い回しや、行春を惜しむ「春のなごりを惜しみけり」、また、夏の短夜を意味する「明けやすき」など一句の言い回しを生かした表現が目を惹く。さらに、第一期と同じく、「季重なり」の現象が多いのも特徴的である。総じて、第三期は第一期と似た傾向を持ち、その中でも、季句の割合の高さが目立ち、全体として季が混み合った特徴が見られるのである。つまり、第三期は、第一期と似た傾向を持ちながらも、季語の扱いが異なっている。その観点から見れば、第二期と同様で、第二期から継続して季語の開拓が行われ、それが第三期の季の扱いの特徴づけているといえよう。

#### 第四期

元禄期に入り江戸に戻った間に巻かれた連句である第四期は、季句の割合が五五・四％と依然高い。総句数における四季句の比率は、春一七・九％、夏六・三％、秋二一・七％、冬八・一％となっており、第二期(江戸滞在中)と秋・冬の比率が似通っている。季語のバリエーションが最も少ないのがこの時期の特色といえる。常套的な季語を使用する一方で、

月出ば行灯消サン座敷かな

越人(秋)

朝夕かゝる柴牆のひよん

苔翠(秋)

(元禄元年「月出ば」半歌仙、発句・脇)

蔓のあくたをあらす野鼠 友五(夏)  
不二詣おひねだはらを草枕 芭蕉(夏)

(元禄元年「雪の夜は」歌仙、初ウ6・7)

「ひよん(柞)」や「あこだ(瓜)」など見慣れない季語を含め他にも「さげ」や「桐の臺」など、植物に関するバリエーションが目立つ。

髪それば国なつかしき須磨の寺 蒼波

花はさかりになすびちひさき 夕菊(夏)

男なき妹がすだれを守かねて 路通(恋)

(元禄元年十二月「皆拜め」歌仙未満三十句、名オ3・5)

なかでも、右の夕菊句のように「茄子」の実のみでなく、その花をも詠出対象にし、花の時期には茄子の実が小さいと表現するなど、季節の表現が、その季節にふさわしく工夫されていることも注意しておきたい。また、「在郷馬」「梟」など季語として見慣れない言葉が並ぶのもこの時期の特色である。たとえば、「梟」は『夫木和歌抄』に雑として所出して以来、季語としては季寄せ・歳時記類に掲げられない語である。しかしながら、この「梟」が詠み込まれた句に関しては、三句続きの冬の二句目に相当する。

椋木に目をさす程の星月夜 曾良(冬)

つらのおかしき谷の梟 路通(冬)

火を焼ば岩の洞にも冬籠 曾良(冬)

(元禄二年「衣装して」歌仙、名オ10・12)

冬は句数の規定により一三句と定められているので、路通の「つらの」句を冬と見なければならぬ。この句は「梟」を冬の季語として詠んだ最も早い例である。このように、第二期同様にして、季の式目の中で、新たな季語への挑戦がなされている。それが、江戸で巻かれた連句の中に見られる、ということは留意すべきである。こうした新たな季節の発見を志向する傾向が、第二期・第四期に共

通することは、江戸での連衆たちの志向を反映したものと見るこ  
とができるだろう。

#### 第五期

第五期は、「おくのほそ道」の旅中である。曾良を伴って訪れた土地土地で連句を興行したため、芭蕉と曾良の句が多い。この時期の変化には慎重になる必要がある。実際に、この第五期からの変化が著しく、芭蕉連句におけるターニングポイント(留意すべき転換期)と見える。

第五期の季句の割合は五二・六%と減少しており、この時期から季句の割合が下限に近く推移している。総句数における四季句の比率は、春一五・五%、夏七・九%、秋二三・九%、冬五・三%であり、春と冬の割合が低い。一方、夏・秋の割合が他の元禄期の中で突出しているのは、旅程の関係から、夏発句・秋発句の歌仙が多いためであると考えられる。また、この時期の特色として、発句から表の月の定座を絡めての三季移りや、裏の月から花前に関わっての三季移りなど、季を集中させる傾向が多く見られた<sup>(8)</sup>。第三期が季の割合が高く、季が混み合っていたために、その一つの結果として季移りが増加したり、季が集中したりするのに対して、第五期は季の割合が低いにも関わらず、季移りが多く見られる。これは、あえて一巻の中で一箇所を季を集中させていくという季移りの傾向、いわば三季移りを志向する傾向だといえる。ある意味で、季の句の集中による一巻の山場を作ろうとする試みである。そして、この三季移りの志向もまた、秋・冬の句の割合が高いという第五期における季の句の割合が影響していると考えられる。

季語に関してみれば、常套的な季語が多く見られるものの、たとえば、次に示す「隠れ家や」歌仙の例のように、

かくれ家や目だ、ぬ花を軒の栗  
まれに蜜のとまる露岬  
芭蕉(夏)  
栗斎(夏)

(元禄二年四月二十四日「隠れ家や」歌仙、発句・脇)  
「栗の花」「露草」「蜜」といった卑近な動植物の描出、「ひよどり」「牛蒡の芽」「ほぐし」「ねぶた咲」「枇杷」「ぬき菜」など旅中で目に触れるような景物のバリエーションが多い。また、

ゆふづきまるし二の丸の跡  
素英(秋)  
清風(秋)  
洞の地蔵にこもる有明  
翠桃(秋)  
芭蕉(秋)  
流人柴刈秋風の音  
桃里(秋)

(元禄二年五月下旬「涼しさを」歌仙、初オ4・5)  
「栖霞」や「葛の葉は猿の涙や染つらん」  
芭蕉(秋)  
流人柴刈秋風の音  
桃里(秋)

(元禄二年四月「秣おふ」歌仙、名オ10・12)  
「栖霞」や「葛の葉」を意味する芭蕉句など植物の紅葉のバリエーション他、植物を中心とした景物のバリエーションが格段に増えている。さらには、「初刈の米」や「とくさ刈」「稲干す」「種蒔」「菅刈る」など農耕に関わる語も多く見られるのも特徴的である。総じて、旅中の展開にもとづくかと思われる句があるなど、季語のリアリテイーを重視し、それを元に連句の季節感の表現がなされていると考えられる。

第六期

第六期は、京都・近江・伊賀漂泊中に巻かれた連句で、この時期からいわゆる「かるみ」への志向が指摘されている。季句の割合は五・五％と低い。総句数における四季句の比率を見てみると、春一七・一％、夏六・三％、秋二三・一％、冬六・二％となっている。第五期に比べて、夏・秋・冬の割合が減少する一方、春の割合のみが増加している。季語を見れば、全体で上位に見られた常套的な季語

や景物が増加し、この時期の句数に対して、使用された季語の種類が少くない。そうした中で、言葉を組み合わせることで季節感を表現したもの、いわば季語の造語化が指摘できる。たとえば「月」「花」や季節名、常套的な季語と組み合わせることで一句の季節の表現がなされていたり、「芙蓉の花」「紫蘇の実」「露の芽」など「の芽」や「の芽」といった着眼が細部にまで及ぶ季感表現、また「寒し」「涼し」「すさまじ」のみならず「寒初る」などの寒暖の感覚表現のバリエーションが非常に多く見られる。おおよそ、第五期と似た特徴の季語バリエーションを持つのだが、なかには、

日を負て寐る牛起す雲雀かな  
式之(春)  
たれ摘み残す菊のひと畑  
拙許(春)

(元禄三年春「日を負て」半歌仙、発句・脇)  
種芋や花のさかりに売ありく  
芭蕉(春)

こたつふさげば風かはる也  
半残(春)  
ひとへのきぬに蚤うつりけり  
三園(夏)

賤の屋もかひこしまへば広くなり  
良品(夏)

(元禄三年三月二日「木のもとに」歌仙、名オ4・5「糞虫庵小集」)  
此夏もかなめをくゝる破扇  
園風(夏)

醬油ねさせてしばし月見る  
猿雖(夏)  
(元禄四年二月中旬「梅若菜」歌仙、名オ11・12「糞糞」)

「菊の苗分け」「火燧ふさぐ」「蚤しまふ」「醬油ねさせる」などの生活に結びついた言い回しにより、季節感を表現した句が一際目を惹く。一句の大半の字数を割いて、季の句の季節感が表現されており、しかも、こうした季感表現が景気句ではなく、人事句の一部であることもまた、季句の表現の変化として留意しなければならぬ。

第七期

第七期は江戸滞在中で、季句の割合は五三・五％であり、他の元禄期に比べて高い割合である。総句数における四季句の比率は、春一七・四％、夏六・三％、秋二一・九％、冬七・九％と、同じく江戸滞在中の第二期・第四期と似通っている。だが、貞享期と異なるのは、この時期の総句数に対しての季語の種類がさらに減り、常套的な季語が多く用いられる点である。とはいえ、その一方で、次のような「涼しい月」や「冷たい（猫の…）」など、口語表現が増えてくる。

むだ口に涼しい月の入かゝり

支考（夏）

あの榎から蚊柱がたつ

支考（夏）

（元禄五年正月下旬「鶯や」歌仙、名オ11・12）

つめたい猫の身をひそめ来<sup>ル</sup>

桃隣（冬）

むつかしや襟にさし込姫の

彫棠

（元禄五年十二月二十日「打寄りて」歌仙、初ウ6・7）

殊に、桃隣句に詠み込まれている「冷たし」は、本来詠み手の皮膚感覚において捉えられる語である。それを「冷たい猫」と「猫」に用いたために、自身の懐に入った猫の冷たさを実感することで冬の季節感を詠み込んでいる。とともに、「冷たい猫」という言い回しは、心象表現とも響いて、春季の「恋猫」をイメージさせてくる。春にはまだ早いがために、誘いにのらぬ猫の冷淡さをも彷彿とする。感覚表現を口語的に用いることで、より強く心理描写が意識された表現といえよう。

さらに、第六期同様に、季句の表現が一句の大半に及ぶ例が、第六期に増して目に付くようになる。

けふばかり人も年よれ初時雨

芭蕉（冬）

野は仕付たる麦のあら土

許六（冬）

（元禄五年十月三日「けふばかり」発句・脇）

黒部の杉のおし合て立

芭蕉

はびこりし広葉の茶園二度摘て

濁子（夏）

（元禄七年春「傘に」歌仙、初ウ2・3）

竹の皮雪駄に替へる夏の来て

石菊（夏）

稲に子のさす雨のばら〜

杉風（夏）

手前者の一人も見えぬ浦の秋

野坡（秋）

（元禄六年冬「雪の松」歌仙、初ウ5〜7「炭俵」）

花月 丈山 鬮<sup>テ</sup>

素堂（春）

しのを杖つく老の鶯

芭蕉（春）

剪<sup>テ</sup>銀鮎一寸

素堂（春）

（元禄五年八月八日「破風口に」和漢歌仙、名オ2・3）

「仕付けたる麦」「茶二度摘む」「稲に子のさす」「鮎一寸」など、それぞれ一句における季の表現が一句全体の表現に関わるという点で第六期と同じ傾向を持つ。だが、第六期ではそれが人事句に多く見られた表現であったものが、第七期では、右に見たように景気の句にまで拡大して季感表現がなされているのである。「稲に子のさす」では、「稲」の本季、秋季より発想して稲穂の実りはじめた頃である晩夏の稲の様子を、「鮎一寸」では、本季、夏季にいたるより小さい鮎の様子を描き出している。芭蕉には、この句同様に「一寸」という言葉を用いた「曙や白魚白きこと一寸」（貞享元年「野ざらし紀行」）や「武蔵野や一寸ほどな鹿の声」（延宝四年「誹諧当世男」）などの発句があり、その景物の本季に近づく様子を詠むことで季をずらした表現が見られる。この句もそうした季のずらした表現方法の流れの上にあるのものと位置づけられよう。しかもこうした表現は、一見見慣れぬように思えて、貞享期のような季語自体が凝ったものとは明らかに性質が異なっている。それは、季語の季感を故意に動かすことで、一句の句意にまで季の表現を広げたためであり、

芭蕉晩年の連句における特筆すべき特徴といえよう。現実の詠出対象に即した表現を用いることで、季語の本季からのズレが描かれる。それが一句の句意にまで季の表現を広げようとする作意と相まって、この時期の新しい季節感を詠もうとする志向をあらわしているといえよう。さらに、「稲の子の…」句のように、季移りの付合に利用され、季の前後に幅が生まれるために、他季に自然に移行できるように促されている。一句の季節感はもちろんだが、こうした表現は、付合世界での季節の構築が意識されているように思われて興味深い。

また、第七期の特色としては、連句によって季の割合の変動が激しいことがあげられる。とりわけ、「水鳥の」歌仙や「口切に」歌仙、「破風口に」和漢歌仙など、芭蕉との付合の中で季が集中し、季移りが多出していることも、注目に値する。すなわち、第七期のその他の連句での季の割合が非常に低い、とも言い換えられる。現存する連句の巻数も多く、なかには巻き直されたものも存在している。こうした中で、季の割合の差異が、いかなる意識と結びつくのか。「ハレ」の場と日常という興行意識の問題、また懐紙の質の問題も含め、改めて検討する必要がある。が、今は指摘に留め、別項に譲りたい。

### 第八期

最後の旅中の第八期は、季句の割合が最も低い。五〇・四％という数値は、歌仙の句数に換算すると、一八句ほどとなり、前にも記したが、最低限の季の句数であることがわかる。いかに、雑の句を中心に、この時期の連句が展開されていたかがわかるだろう。総句数における四季句の比率を見れば、春が一四・六％、夏七・二％、秋二二・二％、冬六・五％となっている。とりわけ、春の割合が全時期を通じて最も低い。これを歌仙の句数に換算すれば、五句ほどとな

る。すなわち、花の定座関連でのみしか詠み込まれておらず、しかも、名残の花関連の春に関しては、名残裏五句目（定座）から始まり、挙句との二句のみ、という配置にほぼ固定している、と考えてよい。もともと、例外も見られ、挙句が春以外のものや、表六句のみのもの、半歌仙や歌仙未満のものなど、この時期の連句がすべて春二句で巻き挙げられているわけではないが、元禄七年夏「葉がくれを」歌仙以降の連句では、とりわけ歌仙形式のもので、こうした特徴が見られる。この時期の、連句の展開の中心は季節ではなく雑の句にある。人事句増加にともない、それに相応した季の句の表現、また季語が選ばれたろうことは想像に難くない。実際に、使用された季語を見れば明確で、全体で上位に挙げられた常套的な季語が多用されたことが、一見して季語の種類の少なさでわかる。景物に関しても比較的日常的に目にする平易な季語が並ぶ。

田のくさどきにはやる富士垢離

(夏)

蚊のぬざばあるものでない夏の月

(夏)

右のように「季重なり」の現象も、「月」や四季名に限らず見られる。そして、同季で季語表現を重ねるものが多く見られ、他季の季語を重ねた貞享期とは明確に異なっている。

とれたやら浜から通る肴籠

惟然

彼岸のぬくさは是でかたまる

洒堂(春)

(元禄七年九月二十七日「白菊の」歌仙、初ウ9・10) しかも、「田のくさどき」「富士垢離」や「彼岸のぬくさ」などという言い回しが一句の大半に及ぶことから、季節という観点で見れば一句が説明的となっている。このように、第六期・七期同様、一句の言い回しにまで広げた季感表現が多く見られ、それが特に第八期においては特徴的である。

秋来ても晶の土のひゞわれて

八桑(秋)

雲雀の羽のはえ揃ふ声

芭蕉(秋)

べら／＼と足のよだるき華盛

子珊(春)

(元禄七年五月上旬「紫陽草や」歌仙、初ウ9〜11)

目つらもあかず霰ふるなり

芭蕉(冬)

からびたる櫟林に日がくれて

山店(冬)

(元禄七年五月上旬「新麦は」歌仙、名オ4・5)

名月の餅に当たる関東早稲

葉文(秋)

ことしはいかう渡る安持鳥

葉文(秋)

萱茸にしつぼりとふる秋の雨

(秋)

(元禄七年六月中下句「ひらく」と百韻、名オ7〜9)

秋のあらしに魚荷つれだつ

畦止(秋)

家のある野は刈あとに花咲て

惟然(秋)

(元禄七年九月十四日「升買て」歌仙脇・第三)

例を挙げるならば、右のような「雲雀の羽のはへ揃ふ」「からびたる櫟林」「渡るあじむら」「刈あとの花」などがそれに当たる。しかも、こうした表現は景気句により多く見られる。言葉を組み合わせたり、季語を重ねたりしながら、一句で表現できる字数の大半を使った季節の表現であるといえる。結果として、季語の表現が一句にまで及ぶようになることが、季節のリアリティの追求につながり、そこに一句としての表現の穏やかさと日常性もたらされている。一般に「かるみ」は、平易な言葉を用い、日常卑近な表現を通して詠句することといわれている。そうであるなら、こうした、一句での季節の表現は、まさしく季の句における「かるみ」のあらわれとみることができるだろう。

\*

これまで、貞享元年『冬の日』以降の連句季語について時期的な変遷をみてきたわけだが、こうした貞享期と晩年との差異は、貞享以前の連句からの流れの上にあるとみてよい。貞享以前の季語をみれば、いかに、季節ごとの季語の表現が固定されていたかがわかる。集計上位には、和歌・連歌以来の伝統的な季題や季語が並び、表現も雅語的表現が多い。とりわけ、寛文年間から延宝八年の季語に特徴的である。これは、貞享初年頃の季語の扱い一般と軌を一にするものである。これは、季節の決定を担う季語であるがゆえに、その表現が固定化して用いられていると考えられる。それが、天和年間から貞享元年の季語では、表現の仕方・種類に変化が見られ、寛文・延宝年間に比して、格段に動植物に関わる季語が増える。

また、次に見るように、「夏やきのふ」として立秋の意を表現した「春澄にとへ」百韻の例は、殊に、夏の季語「ほととぎす」をも「程時過ぎて」の意を効かせることですのでに秋となった景を描いたものとして特筆できる。

秋を啼鳥の鳥を迎へせし

才丸(秋)

夏やきのふの郭公さに

其角(秋)

津の国の生田の森の初月夜

読人不知(秋)

(天和元年「春澄にとへ」百韻85〜87)

錦どる都にうらん百つ、じ

麿時(春)

老花ざくら二番山吹

千春(春)

風の愛三線の記を和らげて

卜尺(春)

(天和二年「錦どる」百韻、発句第三)

同様に、右に挙げた「風和らぐ」の例も暖かくなった春風を表現したものの、他にも「しほむ滝」「串柿飾る」「夏隣」「霜を待つ」など、景物と時節とに着目した季節の表現が見られるようになる。言葉と

しては雅語表現を用いながらも言葉の言い回しによって季感をずらしていく手法は、第二期・四期に見られた江戸滞在中での新たな季節の表現の追求する着眼に近い。さらには、季語の表現が一句の表現と密接に関わっていくという、こうした季節の表現方法は、後に、第六期以降の季感表現の萌芽として、大いに注目し値するものだろう。だが、芭蕉連句における扱いとは同一とは言えず、これについては、稿を改めて論じたい。なお、こうした天和年間の季語の特殊性に関して、季語への意識や季の問題を含め分析を行った別稿の用意がある。

このように見てくると、芭蕉連句の季語の使用には時代の経過とともに変化が見られるものである。各所への旅は、新しい連衆との関わりをもたらず。その土地での生活を背景に紡ぎだされてくる「ことば」を連句の中に持ち込むことで、道中の景物、動植物や農耕など、その土地ならではの眼前の時節がその都度取り込まれ、結果として多様な連句世界を獲得したと考えられる。季語が季節の決定する核であった貞享初年から、あらたな季語の発掘へと目が向けられた貞享期の傾向がある。とくに、江戸滞在中の連句には見慣れぬ言葉の使用が目立ち、季節の表現への挑戦が行われていた。この貞享期の連句には、季の句が高い割合で詠み込まれている。それが、元禄二年「おくのほそ道」の旅を境に、その割合が下限に近くなる。しかも季語をみれば、農耕に関わるもの、風土に関するものなど、リアリティーをもって詠まれた季語が並ぶ。第六期になると、その表現は、言葉を組み合わせたリ、季語を重ねるなどして、一句全体での季節感の描出へと変化する。その中で、季節の表現は人事句にまで拡大し、人事の中に季節感を見いだそうと試みられていた。連句によって、バラツキのある第七期ではあるが、こうした一句の言い回しを利用しての季節の表現は、次第に景気の句にまで広がってくる。

最晩年の第八期にいたっては、一句の大半が季節の表現と化し、そうした表現は景気の句が大多数を占める。また、同季の季語を重ねたり、特に寒暖の感覚を表す季語の利用するなどして、一句全体での季節をあらわすような、説明的な季の言い回しが用いられている。すなわち、芭蕉連句においては、晩年にいたるにつれて、季の句の季節の決定が、季語から一句全体の季節表現へと拡大され、そのことによって、これまで季節を見いだされる対象になりえなかったあらゆる事象までもが、季節の表現の中に取り込まれていったのである。季語という、いわば固定化された詩的世界の範疇をこえて、日常世界そのものの中に、季節の発見の試みがなされたと見ることができらるだろう。結局、芭蕉連句の季の句における「季重なり」の現象や一例の季語の増加、使用される季語の多様化などは、いかに新しい季節感を芭蕉が求めてきたかをあらわしていたわけだ。

### 三、日常世界への挑戦

こうして言葉から一句へと季節の表現が拡大していく中で、一句は、それまで季語という本意を持つ「ことば」の切り開く世界から、眼前のリアリティーある日常卑近な世界へとその表現範囲を増幅させていく。それは、いわば、日常世界がその季節の体系へ取り込まれていくことを意味する。そうした例として、顕著なのが、春・秋に比して見るべき景物の少ない夏・冬の詠まれ方であろう。実際に「冬」または「夏」という語が詠み込まれた句を取り上げながら、どのようにして日常性が取り込まれ、その表現範囲がいかなるものか、見ていきたい。



(1) 「冬」と詠み込まれた句

連句で「冬」と詠み込まれた句は、「冬が来ること」が主体に詠み込まれている。実際に連句に詠み込まれた例を見ると、次のような例が挙げられる。

鳥屋籠る鶺鴒の宿に冬の来て

芭蕉(冬)

(元禄二年六月十九日二十一日「温海山」歌仙、初ウ1)

のがれぬやよそからは来ぬ冬の来て

風麦(冬)

(元禄七年七月下旬「残る蚊に」歌仙未満三十句、名オ3)

ひとり娘の冬のこしらへ

濁子(冬)

(元禄六年九月十三日「十三夜」歌仙、初ウ4)

そろそろ出す冬のうり物

去来(冬)

(元禄七年閏五月下旬「葉がくれを」歌仙、初ウ4)

冬はじめ熟柿をつつむすぐりわら

芭蕉(冬)

(元禄七年八月二十三日「松茸や都」十六句、初ウ1)

これらを見れば、冬支度や、冬仕事など、冬に対して身構える人物像が詠み込まれていることがわかる。叙景であっても冬の風物詩に擬人法(人物の行動と共に)を冠して表現されることが多く、その意味で連句において「冬」を詠み込んだ場合、冬の情景に対して人の行為が修飾されていることが特徴的なのである。このように擬人法的に表現することで、対象物とそこに浮かび上がる人物とがリンクされて一句が構成され、主体的人物の描写がなくても自然とそこに人物が含意されるよう詠み込まれている。

次に挙げたのは人の行為そのものを詠んだものである。たとえば、季語「冬籠り」の句(四例)などが、これに該当しよう。

火を焼ば岩の洞にも冬籠

曾良(冬)

(元禄二年「衣装して」歌仙、名ウ1)

をのをの武士の冬籠る宿

芭蕉(冬)

(元禄二年四月二十二日二十三日「風流の」歌仙、名オ4)

冬籠物覚ての大雪に

左柳(冬)

(元禄二年九月四日「はやう咲」歌仙、名オ7)

此里は山を四面や冬籠り

支考(冬)

(元禄四年十月「此里は」歌仙、発句)

これらの句からは、冬に臨んでの過ごし方が浮かび上がってくる。同様に前掲の「冬のきて」の句や、「冬のこしらへ」の句からは、冬支度に追われる人物が想起される。こうした、それぞれの人物の行為・行動を詠み込んだ句は、その生活感が実直に表現されている。しかも、その描写された人物が、総じて、侘しく、素朴な生活をす人物であることがわかる。

また、次に見るように、そうした佗人からの視点から風景描写がなされたり、心象表現を効かせた句が目立つ。

冬の朝日のあはれなりけり

芭蕉(冬)

(貞享元年「霜月や」歌仙、脇)

冬がれわけてひとり唐萱

野水(冬)

(貞享元年「狂句がらし」歌仙、名オ6)

冬景や人寒からぬ市の梅

濁子(冬)

(貞享三年「冬景や」歌仙未満三四句、発句)

生木をもやしてあたる冬の日

岱水(冬)

(元禄元年「雪ごと」に」歌仙、名オ12)

かちで旅だつ冬の山里

卓袋(冬)

(元禄二年十一月三日「とりどりの」五十韻、脇)

冬のかがしの弓を失ふ

三園(冬)

(元禄三年三月二日「木の本に」付延歌仙四十句、名ウ2「風麦」)

能登の七尾の冬は住うき

凡兆(冬)

(元禄三年夏「市中は」歌仙、初ウ4)

麦の小うねをたたく冬空

珍碩(冬)

(元禄三年八月中旬「白髪ぬく」半歌仙、初オ6)

火をうつ声にふゆのうぐひす

如行(冬)

(元禄四年十月「もあぬほど」半歌仙、脇)

小松のかしらならば冬山

芭蕉(冬)

(元禄五年冬「月代を」半歌仙、脇)

冬のみなとにこのしろを釣

濁子(冬)

(元禄六年八月十六日「いざよひは」歌仙、名オ12)

代官の飯屋に冬の月を見て

芭蕉(冬)

(元禄五く六年冬「生ながら」歌仙、第三)

大坂の人にすれたる冬の月

利合(冬)

(元禄六年冬「雪の松」歌仙、名オ11)

削やうに長刀坂の冬の風

里圃(冬)

(元禄七年春「八九の間」歌仙、名ウ1)

たとえば、「伊駒河内の冬の川づら 揚水」(貞享三年一月「日の春

を」百韻、三オ14)や、「冬空のあれに成たる北風 凡兆」(元禄三年

八く九月「灰汁桶の」歌仙、名オ3)、「日の出るまへの赤き冬空 孤

屋」(元禄六年冬「雪の松」歌仙、脇)のように、風景描写中心の例

外もないわけではないが、「冬」と詠み込まれた句には、そのほと

んどに人物の行為が描かれる。すなわち、「冬」に対して、寒さに

備える人物や、擬人化された景物は、その心象表現が強く打ち出さ

れることになる。こうして、一句として侘しさが造形され、冬の「寒

さ」が際だつ句作となっているのが、「冬」と詠み込んだ句に共通

する特徴といえよう。「冬」という語を詠み込むことで、日常生活

の中にある冬という時節が立ち上がってくる。発句の季語体系や季

寄せなどを見れば、季の世界の大半は、景物にある。景気句に季の句が多いのはそのためであると考えられるわけだが、こうして、「冬」という語が詠み込まれた句を見ると、季の句が人事世界にまで広がりを持って表現されている様相が窺われるのである。

ところで、四季名の中で「冬」は、連句では詠み込まれた数が秋・春に次いで三番目であったが、発句では最もその数が少ない。発句の場合を見てみよう。

冬知らぬ宿や初する音霰 (貞享元年)

冬瓜やたがひに変わる顔の形 (元禄七年)

石枯て水しほめるや冬もなし (延宝八年)

冬の日や馬上に氷る影法師 (貞享四年)

面白し雪にやならん冬の雨 (貞享四年)

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす (貞享元年)

冬庭や月もいとなる虫の吟 (元禄二年)

京にあきて此木がらしや冬住ひ (元禄四年)

◇冬籠り

先祝へ梅を心の冬籠り (貞享四年)

冬籠りまたよりそはん此柱 (元禄元年)

屏風にハ山を絵書て冬籠 (元禄六年)

折々に伊吹を見ては冬籠り (元禄四年)

難破津や田螺の蓋も冬籠り (元禄六年)

金屏の松の古さよ冬籠 (元禄六年)

さしこもる葎の友か冬菜売 (元禄元年)

右に示したのは、発句において「冬」と詠み込まれた句であるが、連句と同様、「冬」の素材は「冬籠り」が中心であることがわかる。どのように「冬籠り」を行っている人物を描き出すかという点に主眼が置かれて句作され、人物に主眼が置かれた描かれ方も共通する

ものである。

こうして、人事句への取り込みが「冬」という語を介してなされる。冬は、雪に閉ざされたり、寒さが厳しかったりと、生物も活動を休止する気候の厳しい時節である。その中で、自然に人事に目を向け、家の中への着眼がなされたことは想像に難くない。「雪」「霜」「木枯らし」「時雨」「千鳥」「水鳥」「歳暮」など、冬の季語のバリエーションと詠まれ方には偏りがある。こうした傾向は和歌・連歌以来のものであった。二頁の表①に示した貞享以前の連句季語の上位を見れば明らかだが、連句で冬の句を詠もうとすれば、「雪」や「時雨」などの伝統的季題が繰り返し使用されていた。だが、貞享以降の芭蕉連句にあつては、こうした使い古された季語ではなく、ここで見てきたように「冬」という語を共に詠み込んだり、また「寒し」という寒暖の感覚を表す季語を用いたりしながら、句中に人物を想定して、冬の句が詠み込まれている。こうして、連句という四季折々の景物を詠み込む特殊な環境にあつて、その素材を人物の視点から描き出すことで、冬の句の詠み方のバリエーションを増やしていったのである。言い換えれば、それは、人物の姿や動作の中に、冬の季感を見いだそうとした結果といつてよいだろう。

## (2) 「夏」と詠み込まれた句

実は、「夏」と詠み込まれた句は、連句においては、四季の中で最も少ない。その特徴は、他の夏の季語や他の季節を本季とする季語と共に詠まれていることである。そのため「夏の〜」という表現が目立つ。まずは、連句における「夏の〜」と詠まれた例を、その詠み方に即して分類しながら挙げておく。

### 〈夏〉

京の杖つく唄の夏麦

東藤(夏)

夏川やはや宵の瀬を踏ちがへ

涼葉(夏)

ふところえ畳んで入る夏羽織

馬寛(夏)

夕貞や蔓に場をとる夏座敷

為有(夏)

### 〈夏野〉

秣おふ人を枝折の夏野哉

芭蕉(夏)

### 〈夏草〉

住程人のむすぶ夏草

(元禄二年四月「秣おふ」歌仙、発句)

### 〈夏の夜〉

夏の夜も明がた冴る笹の露

露川(夏)

夏の夜や崩て明し冷し物

芭蕉(夏)

### 〈夏の月〉

狼の番して明る夏月

嵐竹(夏)

市中は物のにほひや夏の月

凡兆(夏)

(元禄三年夏「市中は」歌仙、発句)

(元禄二年二月七日「かげろふの」歌仙、名才1)

(元禄七年六月十六日「夏の夜や」歌仙、発句)

(元禄二年六月四〜九日「有難や」歌仙、脇)

(元禄七年夏「夕貞や」歌仙、発句)

(元禄六年冬「いさみ立」歌仙、初ウ9)

〈夏の日〉

茶をもむ頃やいとど夏の日

芭蕉(夏)

(元禄二年七月二十五日「しほらしき」世吉、初ウ4)

次に挙げた例は、夏という時節の中、他の季語と共に用いられ、夏の句となったものである。

老声くるし夏の鶯

芭蕉(夏)

(貞享四年十二月一日「旅人と我」半歌仙、初ウ2)

夏も小野には鶯のなく

乙州(夏)

(元禄六年七月「朝顔や」歌仙、名ウ2)

此夏もかなめをくゝる破扇

園風(夏)

(元禄四年二月中旬「梅若菜」歌仙、名オ11)

夏寒き関の孫六ぬきはなし

嵐雪(夏)

(元禄五年「両の手に」歌仙、名オ7)

時節としての「夏」自体を単独で詠んだ句と考えられるのは、次の五例である。

草庵あれも夏を十豊

芭蕉(夏)

(貞享二年六月二日「涼しさの」百韻、初ウ8)

水相にたり三またの夏

芭蕉(夏)

(元禄元年六月十七日「どこまでも」表六句、脇)

ものの音も夏はなつをぞふきにける

嵐蘭(夏)

(元禄二年二月七日「かげろふの」歌仙、初ウ9)

竹の皮雪駄に替へる夏の来て

石菊(夏)

(元禄六年冬「雪の松」歌仙、初ウ5)

夏過てから塩に事かく

杉風(秋)

(元禄五、六年冬「生ながら」歌仙、名オ10)

このように見えてくると、「麦」「扇」「冷やし物」などの他の夏の季語や、「鶯」「寒し」「茶」などの夏以外の他の季節の季語、さら

には、季語以外の語句や景物(「川」など)に、いかにして夏の季を  
持たせるか、または、いかにして夏にずらすかが、芭蕉連句におけ  
る「夏」の扱われ方といえよう。「夏」という語を用いることの意  
外性を示し、卑近な事物に夏らしさを発見することを主眼に詠み込  
んでいるのである。

一方、発句では「夏」と詠み込んだ句は「春」と同程度詠まれて  
いる。その意味で発句では、夏をどのように詠み、どう描いていく  
かに関心があつたことが窺われる。以下は発句で「夏」と詠まれた  
句である。

夏近し其口たばへ花の風

(寛文七年)

夏来てもたゞひとつ葉の一葉哉

(貞享五年)

世の夏や湖水に浮かむ浪の上

(貞享五年)

夏の夜や崩て明し冷し物

(元禄四年)

夏山に足駄を拝む門出哉

(元禄二年)

鳥々や千々に碎けて夏の海

(元禄二年)

夏衣いまだ虱を取り尽くさず

(元禄二年)

別ればや笠手に提て夏羽織

(元禄年間)

山も庭に動き入るゝや夏座敷

(元禄二年)

田や麦や中にも夏時鳥

(元禄二年)

〈夏野〉

馬ぼくぼくと我を絵に見る夏野哉

(天和三年)

もろき人にたとへむ花も夏野哉

(貞享五年)

株負ふ人を枝折の夏野哉

(元禄二年)

〈夏草〉

夏草や兵どもが夢の跡

(元禄二年)

石の香や夏草赤く露あつし

(元禄二年)

夏草に富貴を飭れ蛇の衣

(元禄三年)

夏草や我先達て蛇からむ (元禄三年)

## 〈夏木立〉

夏木立佩くや深山の腰ふさげ (寛文十二年)

木啄も庵ハ破らず夏木立 (元禄二年)

先頼む椎の木も有夏木立 (元禄三年)

## 〈夏の月〉

夏の月御油より出て赤坂や (延宝四年)

月はあれど留主のやう也須磨の夏 (元禄三・四年間)

月見ても物たらはずや須磨の夏 (元禄三・四年間)

蛸壺やはかなき夢を夏の月 (元禄三・四年間)

手を打てば木魂に明る夏の月 (元禄四年)

「夏野」「夏草」「夏木立」「夏の月」と、いくつかの季語に固定されて詠まれており、その意味では連句に比べて、発句の「夏」を詠み込んだ句にはバリエーションは少ない。連句の詠み込み方と同様で、語に「夏」を修飾することで、こうした夏に詠み込む素材にどのように変化をつけていくかという観点のもと、さまざまに句作されているようである。いかにして季節らしさを詠み込むのかではなく、このように「夏」と冠することに興味に向いているのが、「夏」の詠み込み方といえよう。

\*

こうして、「冬」を詠み込んだ句では人事世界を、「夏」を詠み込んだ句では日常目にする事象を取り込みつつ、季節の句の表現がなされ、季の句の詠み方のバリエーションが増幅していったと見ることが出来る。すでに述べてきたことではあるが、季の式目を見れば、連句において、夏・冬の句の句数は一〜三句（同季三句去）とされている。言い換えれば、夏・冬の句とは、連句にあつて式目の制約の小さい季であるといえる。詠まれる句数が少ないこともあつて、

連歌以来、この両季に関しては、季語のバリエーションを増やし、あらたな季節感造形をする必要がなかった。そのために、連歌以来、貞門・談林期、そして貞享以前の連句に関しては、固定化された伝統的な季題・季語を利用して季節の展開がなされてきたのである。それが、貞享以降、とりわけ芭蕉晩年の連句においては一句へと季節の表現が拡大されたことにもなつて、冬・夏も同様に新たな季節への挑戦がなされていたと見るべきものであつたろう。

こうした夏・冬における季の式目に対して、春・秋は句数が三〜五句（同季五句去）と、詠み続けなければならぬ句数も多く、しかも定座が絡むため、さらにその制約が増える。そこで、いわばその打開策として「投げ込みの月」と呼ばれる手法がある。連句における季節の展開の中で、式目との兼ね合いから、一見一句とは無縁であるにも関わらず、常套的な季語を「投げ込む」ことで季の式目（とりわけ、句数の規定と月・花の定座）を遵守したものである。特に談林時代に特徴的に見られるものであるが、芭蕉たちの方法は、「夏」「冬」の句を見るに、こうした「投げ込み」の手法とは明確に異なり、新たな季節感の発見そのものであつたと考えられる。

## 四、季節の表現と「投げ込み」

芭蕉連句に特色づけられるこうした季節表現の根本とは、まさしくこうした「投げ込み」の手法であつたと考えられる。そのため、とりわけ四季の中でも「の秋」「春の」などといった、春・秋が詠み込まれたものが多い。実際に、四季名との組み合わせによる季節表現は時期を問わずに多く見られるし、すでに伝統的な季題・季語として「秋風」や「春雨」など本意が確定しているものや、「秋近し」や「春隣」など季節をずらしたものなど、季寄せ類を参照する

だけでもこうした四季名との組み合わせによる季語は数多く存在する。そこで、本章では、見るべき景物の多い春・秋の季節名の詠まれ方名を検討してみたい。「春の空」や「秋の山」など他の言葉と四季名との組み合わせや、「春の雪」「秋の霜」など季語を重ねるものなど、その言い回しの表現に注目しつつ、芭蕉連句での季語の表現の特徴を明らかにしていきたいと考える。

(1) 「秋」と詠み込まれた句

たとえば、「秋」と詠み込まれた句は、連句においては、他の季節のものを含めて一八〇例あり、最も多く詠み込まれている。連句における季の式目によって、春・秋の句数は三から五句、夏・冬の句数が一から三句と定められている。これに、月・花の定座が関わるため、春・秋の句が圧倒的に多くなることは考慮しなければなるまい。だが、その中でも、他の秋を本季とする季語ではなく、あえて「秋」という語を用いた表現が多く存在することは注目できる。秋の季語の偏りをなくし、バリエーション豊かに展開する工夫と考えられよう。

しかしながら、一口に「秋」と詠み込んだ句、といっても、すでに季語として掲載されてくる語もある。発句と比すれば明確だが、たとえば「秋風」「今朝の秋」「月の秋」「秋の暮」、さらに「行秋」「立秋」「初秋」などの時候に関わる語である。連句には、中には「秋」と「暮」とが別々に詠みこまれ、結果として一句で「秋の暮」を意味するもの、また、言い掛けであったり、掛詞であったりと、一語としての意識で詠み込まれているのが判別しにくいものもある。そのため今回の調査においては、表現での分析ということを念頭に、個別の季語ということを考慮はしつつも、こうした語も「秋」という括りで集計を行ったわけであるが、今一度、詠み込まれ方の検討を行う

必要がある。そこで、ここでは、こうした季語としてすでに認定されているものか否かで分類し、その表現を見ていきたい。なお、『滑稽雑談』（正徳三年刊）までを一応の目安として、季語か否かの区別を行った。

まず、「秋」語の中で最も多いのは「秋風」である。貞享以降、四九例ある。その他、「秋の暮」八例、「初秋」三例、「月の秋」三例、「秋の月」三例となっている。「秋風」は発句においても多く詠み込まれる題材でもあり、和歌・連歌以来、伝統的にも秋の主要な題材であった。だが、こうした「秋風」に関する検討については、別稿に譲り、今回は他の「秋」の表現を検討することにする。

実際にどのように詠まれているのかを見てみると、次のようである。ここには芭蕉の付句を挙げたが、まず、「秋」とのみ詠み込まれたものには、「秋」と投げ込まれたものと、背景として秋という季節を提示したものと二種に大別できる。

◇秋

人一代の恋をとふ秋

芭蕉（秋恋）

（元禄元年七月二十日「粟稗に」歌仙、名才6）

あぶらかすりて宵寝する秋

芭蕉（秋）

（元禄三年八月九月「灰汁桶の」歌仙、脇）

二階の客はたれたるあき

芭蕉（秋）

（元禄四年二月中旬「梅若菜」歌仙、初才6）

秋はものかはあげ捨の棟

芭蕉（秋）

（貞享二年六月二日「涼しさの」百韻、名才10）

秋もはや升ではかりし唐がらし

芭蕉（秋）

（元禄七年春「傘に」歌仙、初ウ9）

此秋は夏のほれを煩ひて

芭蕉（秋）

（元禄七年九月四日「松茸やしらぬ」歌仙、名ウ1）

秋もはやばらつく雨に月の形

芭蕉(秋)

(元禄七年九月十九日「秋もはや」歌仙、発句)

二重傍線を付した三例は、句末に「秋」が投げ込まれたものである。「恋をとふ秋」「宵寝する秋」「客はたたれたるあき」と動詞の連体形に続けて「秋」が詠み込まれている。いささか突飛な印象を受けるが、一句においては時節の設定として機能する。こうした句末に投げ込まれた「秋」という表現が元禄四年以降見られないのに対して、時節の提示として「秋」が詠み込まれている例は貞享期から晩年まで幅広く詠まれていることがわかる。

次に「秋」を修飾した例である。「秋の〜」と連体修飾格助詞の「の」を用いて季語として機能させた例、「秋〜」という形で直接季感を付与した例、また「〜の秋」と上にくる言葉の時節を限定する例がある。

〈秋の〜〉

あきの鳥の人喰にゆく

芭蕉(秋)

(貞享元年十二月十九日「海くれて」歌仙、初ウ8)

蝉鳴てまだ洪柿の秋の空

芭蕉(秋)

(貞享二年三月二十七日「つくづく」と「歌仙、名ウ1」)

贅に買るる秋の心は

芭蕉(秋)

(貞享三年一月「日の春を」百韻、三オ10)

秀句には秋の千種のさまざまに

芭蕉(秋)

(元禄二年五月下旬「おきふしの」歌仙、初ウ7)

〈秋〜〉

秋水一斗もりつくす夜ぞ

芭蕉(秋)

(貞享元年「狂句こがらし」歌仙、名オ10)

秋山の伏猪を告る声々に

芭蕉(秋)

(貞享四年十一月二十四日「磨なをす」歌仙、名オ11)

秋山にあら山伏の祈る声

芭蕉(秋)

(元禄元年「雪の夜は」歌仙、名オ9)

〈〜の秋〉

湖水の秋の比良のはつ霜

芭蕉(秋)

(元禄三年冬「鶯の羽は」歌仙、名オ12)

こころをかくすもの売の秋

芭蕉(秋)

(元禄二年二月七日「かげろふの」歌仙、初オ6)

舍利ひろふ津軽の秋の汐ひがた

芭蕉(秋)

(元禄二年五月下旬「おきふしの」歌仙、名オ7)

「秋」が詠まれた句には、一見目に付きそうな視覚的世界の描写に留まらず、「蝉」の声、「山伏」の声などの聴覚的な描写、「秋の心」や「こころをかくす」「恋をとふ」といった心理描写などさまざまに詠み込まれている。「秋」の修飾表現が、元禄二年五月下旬「おきふしの」歌仙においては、一卷に二度詠み込まれていることも注目に値する。こうした様々な要素に「秋」を結びつけることで季節の機微を表現したものと考えられる。結果、秋季の句におけるバリエーションが多用途化し、「秋」という語の多さはこうした秋の季節の表現を季語に留めることなく、日常のあらゆる事象にまで広げた結果であると考えられる。また、秋は時候について詠み込んだ句も多い。「秋立つ」「初秋」「秋の来」「秋近し」「(夏)など、秋の時候を詠み込んだ句には、「秋」が来ることに對する意外さを詠み込んだ句が多い。とりわけ、連句においては「秋」が「来」と詠み込んだ例が多く、九例にのぼる。たとえば、「鞍置る三歳駒に秋の来て 芭蕉」(元禄三年三月中下旬「木のもとに」歌仙、初ウ1「ひさご」)などがそれに当たる。「鞍置る」句では「三歳駒」に秋を見いだしているが、このように、他にも「蝉」や「清水」「田やらみどり」など、まだ秋には似つかわしくないような夏らしい語と共に詠み込

まれ、早くも秋が来ていたのだと、日常目にするあらゆる事象に秋を発見したことを主眼に詠み込まれているのである。

◇秋のころ

秋のころ旅の御連歌いとかりに

芭蕉(秋)

(貞享元年「霜月や」歌仙、初ウ1)

◇秋の日

雲行も秋の日癖のざんざ降

芭蕉(秋)

(元禄六年冬「寒菊や」歌仙未滿三三句、初オ5)

◇秋の暮

此道や行人なしに秋の暮

芭蕉(秋)

(元禄七年九月二十六日「此道や」半歌仙、発句)

◇秋の夜

秋の夜を打崩したる咄かな

芭蕉(秋)

(元禄七年九月二十一日「秋の夜を」半歌仙、発句)

面白の遊女の秋の夜すがらや

芭蕉(秋恋)

(貞享二年三月二十七日「何とはなしに」歌仙、初ウ7)

秋水一斗もりつくす夜ぞ

芭蕉(秋)

(貞享元年「狂句こがらし」歌仙、名オ10)

あぶらかすりて宵寝する秋

芭蕉(秋)

(元禄三年八〜九月「灰汁桶の」歌仙、脇)

◇秋・月

さる引の猿と世を経る秋の月

芭蕉(秋)

(元禄三年夏「市中は」歌仙、初ウ11)

秋もはやばらつく雨に月の形

芭蕉(秋)

(元禄七年九月十九日「秋もはや」歌仙、発句)

「秋」を時間帯で分類すると右のようになる。夜に詠まれたものが多く、秋の夜長の語らい、また、秋の月見など秋の夜長をいかに

過すかということが表現されている。

一方、発句では、「秋」と詠み込まれた句を見てみると、時候を題材にした句が目立つ。「秋」という季節、「初秋」「暮秋」「秋深し」「秋来る」「秋近し」「秋を経」など非常にバリエーションが多く「秋」という時節を詠み込んでいる。用いられた季節は、「秋」「今朝の秋」「初秋」「暮秋」「秋の暮」「行秋」「秋近し」(夏)などと、時候を表す季語を用いながら「秋」という時節を意識して秋らしさへの感慨を詠み込んだ句が多い。それ故に、「秋」が来ることを喜び、深まらることを情趣深く感じ、過ぎゆく秋への名残惜しむ気持ちの主眼となるのであろう。風や不意に感じる肌寒さなどによって「秋」を感じているように句作する連句の「秋」の詠み込み方とは一線を画すものがある。一例を挙げるなら、次のようである。

〈秋の〉

雨の日や世間の秋を堺町

(延宝六年)

見渡せば詠れば見れば須磨の秋

(延宝七年)

この松の実生えせし代や神の秋

(貞享四年)

刈りかけし田面の鶴や里の秋

(貞享四年)

送られつ送りつ果ては木曾の秋

(元禄元年)

寂しさや須磨に勝ちたる浜の秋

(元禄二年)

雁間に京の秋におもむかむ

(元禄三年)

風色やしどろに植し庭の秋

(元禄七年)

摘けんや茶を風の秋とも知らで

(天和元年)

〈秋の〉

面白き秋の朝寐や亭主ぶり

(元禄七年)

秋の色糖味喀壺もなかりけり

(元禄四年)

憂きわれをさびしがらせよ秋の寺

(元禄四年)



## ◇秋の夜

秋の夜を打崩したる話かな

(元禄七年)

## ◇秋の露

初茸やまだ日数経ぬ秋の露

(元禄六年)

## ◇秋の柳影

何喰て小家は秋の柳蔭

(貞享・元禄年間)

発句においては、(〜)の秋)や(秋の〜)と語を修飾する形で秋という時節をどう捉えたのか、どこに秋らしさを感じたのかを示す句作が多いことが挙げられる。右に示した例でもわかるように(〜の秋)という使い方は「須磨の秋」や「木曾の秋」「庭の秋」のように、秋を見いだした場所が示され、(秋の〜)では「秋の朝寐」などやまた成句として「秋の暮」「秋の夜」なども同様、秋らしい時間帯が表現されている。

酒店の秋を障子あかるき

其角(秋)

(貞享二年六月二日「涼しさの」百韻、初オ4)

松のひびきを草庵の秋

桐葉(秋)

(元禄元年「色々のきくも」歌仙、脇)

町内の秋も更行明やしき

去来(秋)

(元禄三年八〜九月「灰汁桶の」歌仙、初ウ9)

手前者の一人も見えぬ浦の秋

野坡(秋)

(元禄六年冬「雪の松」歌仙、初ウ7)

夜づめ引たる町宿の秋

支考(秋)

(元禄七年九月二十七日「白菊の」歌仙、初ウ8)

湖水の秋の比良のはつ霜

芭蕉(秋)

(元禄三年冬「鳶の羽は」歌仙、名オ12)

面白の遊女の秋の夜すがらや

芭蕉(秋恋)

(貞享二年三月二十七日「何とはなしに」歌仙、初ウ7)

だが、連句においては、そのような「秋」の使い方は右に示した通りで、それほど多くない。(〜)の秋)では発句同様、場所が示され、それが「酒店」であったり「町内」であったり「草庵」であったりと、地名というよりは身近な場所に秋への興味を示している。

侍の身をかへよとや秋の蟬

芭蕉(秋)

(元禄元年十二月「皆拜め」歌仙未滿三十句、初ウ9)

声ざりて鳥居に残る秋の蟬

又玄(秋)

(元禄元年二月「何の木」歌仙、名オ9)

秋の霜おく我眉の色

鼓蟾(秋)

(元禄二年七月二十五日「しほらしき」世吉、名オ4)

革足袋に地雪踏重き秋の霜

酒堂(秋)

(元禄五年九月下旬「青くても」歌仙、名オ3)

連句の場合、(秋の〜)と修飾された場合、具体的な時間を詠み込むのではなく、「秋の蟬」「秋の霜」など他の季節の景物を秋に見いだすことによって、秋の句中で用いるものが多い。これには、句数なども大きく影響しているだろう。そうした制約の中で、他の季節の景物を秋の句の中に詠み込む時に生じる違和感を解消し、それによって得られるリアリティー、二つの季節を一句で同時にイメージさせる効果などが期待されつつ、一句の世界の幅を広げていくように詠み込まれているのである。こうした傾向は、とりわけ、「秋の露」や「秋の鶏頭」など、また「秋の月」などと同季の景物と共に用いられた場合に顕著である。これらは、「秋」という語を重ねずとも秋であることが明確なのにも関わらず、あえて「秋」であることを意識させるものであって、そうすることによって、より一層「秋らしさ」が強調された句となる。

もう一つ、特筆すべき連句での特徴は、秋における「寒さ」を詠んだものである。これらは、ことさらに秋風の寒さを描いたものと

いえる。「風」と気温とが密接に結びき、風によって生じた「寒さ」に秋を感じ取っているのである。以下は「秋」と詠まれた句の中で「寒さ」が共に詠み込まれた句例である。

糺の館屋秋さむきなり

李下(秋)

(貞享三年一月「日の春を」百韻、二ウ10)

秋寒く米一升到に雇れて

芭蕉(秋)

(元禄元年二月「紙衣の」歌仙未満二三句、初ウ1)

あきやや寒き饅頭の湯気

支考(秋)

(元禄二年〜元禄五年「忘るなよ」歌仙、名オ12)

そろそろ寒き秋の炭焼

残夜(秋)

(元禄二年九月八日「一泊り」歌仙、名オ12)

衾こそぐる秋寒きなり

馬寛(秋)

(元禄六年冬「いさみ立」歌仙、初オ6)

秋もやや今朝からさむき袷がけ

惟然(秋)

(元禄七年閏五月下旬「牛流す」歌仙、初ウ3)

大根も細根になりて秋寒し

芭蕉(秋)

(元禄七年九月十四日「升買て」歌仙、名オ7)

秋さむくあはれと拾ふ虫の殻

夕菊(秋)

(元禄元年「雪ごと」歌仙、名オ7)

冬を本季に持つ季語「寒し」は、冬の句の中で単独で用いられた例は一四例で、他の冬の季語と共に詠み込まれたり、他の季節の中で用いられることが多い。その中でも秋の句の中で詠まれることが最も多い。「やや寒」「うそ寒」「そぞろに寒し」「肌寒」「夜寒」など、秋における「寒し」のバリエーションは、すでに季語として確立し、その種類も多い。こうして「寒し」が、秋の句中にあつては、冬を間近に控え、日に日に寒くなる感覚が身にしみて、もの寂しさを感じさせる。と同時に、折りに触れてぞっとするような寒さが、冬へ

の移り変わりを予感させ、過ぎゆく「秋」を惜しむ気持ち効果が表現されるのである<sup>10)</sup>。秋の「寒し」の句例には、そうした「秋」への思い入れが感じさせられる。たとえば、

檜皮むく老の頭の秋寒く

芭蕉(秋)

(元禄二年七月七日「星今宵」歌仙断簡、名オ1)

というように、実りの季節「秋」の中の「寒さ」があわれさを強め、寂しさや孤独感を募らせる。そしてそれが一層「秋」という豊かな季節が過ぎゆくことへの慕情を際だてているのである。

その他にも、聴覚から秋を感じ取った例も見られ、「どこやらすごき秋の水音 桂楫」(貞享二年「ほととぎす」歌仙、名オ10)というように「水の音」によってや、「秋蟬の虚に声きくしづかさは 野水」(貞享元年「はつ雪の」歌仙、名ウ1)のように、「秋蟬」など弱る虫の音を詠み込んだ例、また、「秋山の伏猪を告る声々に 芭蕉」(貞享四年十一月二十四日「磨なをす」歌仙、名オ11)「秋山にあら山伏の祈る声 芭蕉」(元禄元年「雪の夜は」歌仙、名オ9)など、人の「声」も秋を感じる要素である。また、「秋」という時節に臨む人物を描いた句や、恋句も散見される。だが、「秋風」や秋に感じる「寒さ」によって秋を実感していくように詠まれており、芭蕉連句における「秋」の詠み込まれ方が、とくに「風」という触覚や「寒さ」という皮膚感覚において、秋らしさを見いだし、表現されたものであったと考えられる。それが、秋の初めの方では秋になった喜びと寂寥感を同時に詠み込み、終わりになれば、ことさら、その「寒さ」から感じる寂しさやあわれさ、悲しさを表現する。このように秋の中でも時節に応じてその余情に変化があるものの、「秋」という言葉を一句に持ち込むことで、様々な事象や、日常折りに触れ感じる感覚をも秋の中に取り込みつつ、秋の句として機能させているものといえよう。

## (2) 「春」と詠み込まれた句

「秋」の句に対して、「春」と詠み込まれた句を見てみると、春は触覚や皮膚感覚には頼らず、視覚的に、春という時節を捉えることから始まる。その表現主体として気象に注目したものが多いたのが特徴的である。それは、「春」を含む季語のバリエーションを見て同様である。「立春」一例「初春」一例「行春」(「春の暮」を含む)が七例と時候に関わる季語が固定化し、句数も少ないのに対し、「春風」二三例「春雨」一例「春雪」六例と気象に関わるものが大多数を占める。気象を通して春を認識するよう句作されているのである。たとえば、春の空に注目して詠んだ句は、次の通りである。

何が何やらはるのしら雲

前川(春)

(元禄二年「衣装して」歌仙、挙句)

艶に曇りし春の山びこ

曾良(春)

(元禄二年六月十一日「めづらしや山」歌仙、挙句)

連歌師の杖をわする春の空

式之(春)

(元禄三年二月六日「鶯の笠」歌仙、名ウ5)

那智の御山の春遅き空

嵐蘭(春)

(元禄五年九月下旬「青くても」歌仙、初ウ10)

春の空十方ぐれるときぐくと

野坡(春)

(元禄七年春「傘に」歌仙、名オ1)

春は三月曙のそら

野水(春)

(元禄三年八月九月「灰汁桶の」歌仙、挙句)

春らしさを、「雲」や、曇りがちで白んだ空、霞がかつた光景、花の白さと同一化されるおぼろげな空の様子が喚起される。「明けゆく空もいつしか霞、谷の水うち解けて、岩も音もしるく、梢の雪も、今朝は花かとおほめかれ、朝日のかげももうら、かに、時知る鳥の声にも驚き、見慣れたる人も、今更珍しき心などを詠む」(「増

補和歌題林抄」「立春」項<sup>(1)</sup>)とあるように、春は「霞」春になってもお残る「雪」、うららかな春の日差しなど気象に関わることが、詠まれることが本意といつてよい。

春のしらすの雪はきをよぶ

重五(春)

(貞享元年「霜月や」歌仙、名ウ4)

たとえば、右の例は春における「雪」を詠んだものではあるが、「春の雪」と詠むのではなく、「春のしらす」という言い回して、「春」という語は直接的には「しらす」にかかる。「しらす」という当季季語を持たない語に春らしさを付与した例といえる。その意味で、秋の句同様、日常世界への季の取り込みがなされているのである。

このように、実際に春めて見えたものを描くことで、春の情景が詠まれているのである。そのため、「秋」に多く見られた「寒し」との組み合わせや、「暖か」などの寒暖の感覚を共に詠み込む例は少なく、「此春はいつより寒き花の陰 芭蕉」(元禄六年四月「篠の露」歌仙、名ウ5)など「春寒」は四例、「暖か」を共に詠み込んだ例はない。一句の表現は、皮膚感覚から「春」を感じ取るのではなく、このように、連句にあつては、春の空・春雨「春風」「春雪」など、春は視覚的描写を通して、春らしさが表現されているのである。しかしながら、量的観点から見れば、秋ほどにこうした詠まれ方は多く見られない。春を含む季語バリエーションにはほぼ集約されている。ひとつには、月の句の関連で三箇所、出現する秋季に対し、春は花関連で二箇所、しかもその二箇所目は名残の花・挙句と二句である場合が多く、こうした句数の影響もある。また、ひとつには、多くの植物が芽吹き、多くの生物が活動を始め、新年に関わる季語も数多く存在する。このように、春の景物はその種類も多く、春を冠することでそのバリエーションを増やす必要に迫られなかったのではないかと推測できる。そのため、「秋」に三例見られた「投げ

込み」の句は春においては見られない。

こうした連句の傾向に対し、発句をみれば、「秋」の句同様に時候に関わる季語が目立つ。「今朝の春」他「立春」「初春」「行春」「春の暮」など、時節に注目することで、春が来た喜びと、過ぎゆく春への名残惜しさを詠み込んでいる。とくに、「千代の春」「君が春」「花の春」など新年の言祝ぎが多く見られ、その目出度さ、春らしい穏やかさが詠み込まれている。だが、発句においても「春」の情景は「人も見ぬ春や鏡の裏の梅」(元禄五年)などと視覚的描写によってなされており、連句での「春」と詠み込まれた場合と同様の傾向がある。しかし、「春」と詠み込んだ発句は、四〇句余りであり、連句に比べてそのバリエーションも少ない。景物を詠み込んでいく発句において、取り留めて「春」と詠み込む必要が少なかったためであろう。それゆえに、「梅」「桜」「柳」など、春の伝統題が発句においては数多く詠まれている。

### (3) 芭蕉連句における季句の表現

先に私は、第一章の中で、連句季語の特色として「月名」(月次の月)「節句」「寒暖の感覚」を挙げた。実はこうした季語が発句ではなく連句に多く詠み込まれるのは、四季名と同じく春・秋の季の句のバリエーションの一つとして機能することが求められていることである。たとえば、「秋」と詠まれた句の中には、句末に「秋」と投げ込むことで句意の側からすれば、詠み込まれる必然のない「秋」の投げ込みを三例、すでに確認したところである。こうした手法が月名や節句が詠み込まれた際にも見受けられる。実際に、春の季語「如月」(全五例)を例に今少し見てみたい。

奥のきさらぎを只なきになく

野水

(貞享元年「初雪の」歌仙、初ウ2)

しみづほり出す如月の雪

夕菊

(元禄元年十二月「皆拜め」三十句、初ウ12)

きさらぎや落行甲おもたたくて

蘭夕

(元禄二年九月八日「一泊り」歌仙、名オ1)

米の調子のたるむ二月

木白

(元禄七年七月二十八日「荒々て」歌仙、挙句)

恵比酒の餅の残る二月

亀柳

(元禄七年九月二十六日「此道や」半歌仙、初ウ4)

二重傍線を付した後半の三例が句末に投げ込まれた「如月」の例ということになる。 「秋」の例は、元禄四年以前に見られたわけだが、「如月」など月名・節句の例においては晩年まで見られる。

ことは雨のふらぬ六月

芭蕉

(元禄七年春「むめが香に」歌仙、初ウ4)

小姓の口の遠き三月

岱水

(元禄六年七月「帷子は」歌仙、初ウ12)

何やら事のたらぬ七夕

等窮

(元禄二年四月二十二〜二十三日「風流の」歌仙、名オ8)

とくに、短句において、しかも「きさらぎ」「みなづき」「さんがつ」「たなばた」と四音という音数を句末に据えていることが指摘できよう。連歌論などで座りのよいとされる「二五三四」、こうした語調の問題もあって四音の語が投げ込まれているとも考えられる。だが、その一方で、こうして季節の前提を言葉に託し、投げ込まれたこととなつ作られた世界感とは、より日常の事象へと目が向けられることとなつたのも事実ではなからうか。それゆえに晩年まで、こうした方法がなくならず利用され続けているのであろう。寒暖の感覚にしても同様で、晩年に多く見られる季語であるわけだが、季重なりの句に多く用いられたり、あるいは、表現を工夫されたりしながら、感覚

を示すことによつて人事の展開の中に季節感を見いだしていくことに貢献している。四季名と同じく、総ては季節感の造形の手法と考えてよいのではないだろうか。

そもそもは、投げ込みと同手法であつたはずの四季の詠み込み方が、「夏」「冬」を中心として日常世界に季節を見いだす切り込みの方法として確立し、「春」「秋」においても種種様々な卑近な事物や人事句におけるまで、あらゆる事象の中に取り込まれることとなつた。これを季の句の側から見れば、四季名を組み合わせるによつて、連句季語の季語体系が景物からあらゆる日常へと増幅されていくもの。それは、日常における季節の発見の方法であるとともに、使用する季語の固定化を避ける手段として利用されたものではなからうか。それゆえに、晩年にいたるまで、投げ込み的に月名や節句が句末に詠み込まれ、結果として一句の表現の可能性を拡大したものと考えられる。

\*

これまで見てきたように、芭蕉連句では「秋」は触覚から心象表現、「春」は視覚的描写、「冬」は人物の行為を介して、「夏」は夏を詠み込む素材を趣向の中心として季節名が詠み込まれ、その中でこれまで季の体系とは無縁だった世界が、新たに季節感を付されて連句の中に取り込まれていた。こうした季節間での詠み分けもまた、連句における季句の詠み方の特殊性であろう。季節での差異は発句においても見られたが、連句ほどその季節間での詠み分けの差異が明かではない。発句の季節名の詠み込み方は、時候や、季題を用いてその季節らしさをいかに新たな角度から捉えようとしているかを示すことが多い。それに対して連句では、その季節らしさを感じる素材がより身近な存在にまで及んでいる。こうした新しい素材の中にそれぞれの季節らしさを詠み込んでいく連句と、季節や景物を中

心に季節の捉え方を刷新しようとする発句と、それぞれ描き方の違いが四季名を詠み込んだ句には見られる。こうした連句・発句との差異は、他の季語にも見られると考えられる。

すでに述べたように、貞享以前の連句において、「露」は、同じ巻に複数回使用されている。秋を本季に持つこうした季語が、一巻に頻出することは、これらが秋の句を詠む際の常套季語であつたことを物語る。「露」は花の露や葉に降りた露の実体として、秋以外の季に取りなすことが可能であり、また儂いものや小さなもの象徴としての側面や、呼応の副詞として「つゆゝず」の用法を用いたものなどとの多義的側面が目され、和歌・連歌以来多用されたことばであつた。それは、本意とは異なる多くの（日常的な語の使用のレベルの）意味をも有するということである。ことばの様々な側面を描くことで、同じ語を一巻に頻出させても、展開上差し障りなかつたのであろう。そのため、これは百韻の場合ではあるが、「露」は一巻に用いるべき回数が規制されてはこなかつた。それに対して、句数自体も少ないわけだが、意味が限定されてしまう「ほととぎす」は一座一句物とされ、「雪」は「春の雪」「富士の雪」などと四季に置き換えることで四句物とされている。だが、それでも一巻に「雪」を四句まで詠むなど、伝統的な季語を多用する天和以前における季の句の傾向が見て取れる。

こうした複数回使用されるという傾向は、天和年間になると減少し、貞享以降ではほとんど見られなくなる。それゆえに貞享以降の連句においては、その分一巻における季語のバリエーションが豊かになる。伝統的な季語ばかりに偏るのではなく、身近に見られる景物を詠み込んだものであつたり、俳諧において季語として確立してくるものであつたりと、いわば卑近な素材がより多く詠まれるようになっていくのである。それだけ、貞享以降の芭蕉連句においては、

一卷中に繰り返し同じ季語が利用されることを避ける意識が強かったと推察される。季語は詩的語彙であるがゆえに、和歌・連歌以来の蓄積された本意がある。同じ季語を使用することは、同じ展開を招きかねない。そうした輪廻を避ける発想が季の句においては、季語を変えようという手段において実現していたのではないだろうか。

やがて季の句は季語から一句の言い回しへと拡大され、その中で新たな季節感が見いだされていったのも、一度使用した季語を使うまいとする意識のあらわれと見ることができよう。一句において表現されることで、季の句における季節感は一アリエーティを持って読者に受け止められるに違いない。芭蕉には、巻き直しの連句や、推敲の後が見られるものもある。撰集として出版されるのに合わせて、読者の視点が意識され、こうした連句文芸の完成度が高められていたと見ることができよう。

### おわりに

連歌・俳諧の連句における季の句とは、季語が存在すれば成立するものである。それゆえに、天和以前の連句では伝統的な季節が用いられることが多く、一句としては、季語の本意を背景に、季語以外の言葉や言い回しによって、季の句の新しい表現が試みられてきた。だが、芭蕉連句の季の句においては、季語のみに季節感を託すのではなく、一句全体にまで拡大した季節感の表現が試みられていた。これまで本稿では、芭蕉連句における連句季語の特徴を、貞享以前の連句季語、発句の季語と比較しながら、使用された季語の特色、時期的傾向とその用いられ方の変遷、さらに、季の句の表現を探ってきた。

連句季語の特殊性は、なによりもまず、詠まれる季節の偏りに起

因するものである。季の式目から、秋と春の季語が多種多様に詠み込まれていた。さらに、言葉や季節の転換を図りやすい季語が選ばれる傾向がある。これは「前句に付ける」という連句の特殊な文芸形態が生み出した季語のバリエーションであるといえる。加えて、寒暖の感覚をあらわす季語など、感覚表現が多用される。句中では、心象表現とも響き合い、季節感が人事世界の中へと拡大されて、季節の追求がなされた。その他、月・花の定座や、拳句など、詠まれる場所にふさわしく、特定の季語が好まれていた。総じて、連句季語には、連句という特殊性に根ざして連句ならではの季語の偏りがあったのだ。春・秋の句数に関連する両季の季語のバリエーションは、景物にとどまらず、世態・人情・風俗にまで及び、日常卑近な題材が季の句の表現に加えられることとなったのである。

時期的傾向を概観すれば、季節を新しく発見しようとする態度が見られた。季語は季節を決定することにおいてのみ用いられていたと見える貞享初年の第一期。趣向がかった句中にあって、それに反して伝統的な季節が多用されている。これが江戸滞在中の第二期になると、あらたな季語を用いようと模索していく。第三期は、季の句の割合の高さは第一期と同様であるが、第二期から引き続き季語の発掘がなされた。第四期においては、季語の発掘とともに、一句の言い回しを活かして季の句が表現されるようになる。このように、旅中での景物や見聞においてそのバリエーションを深めつつ、一方で江戸滞在中には、新たな季節の発見に挑戦していたわけである。季の割合は第五期、元禄二年「おくのほそ道」旅中の連句を境に、大きく下降する。詠み込む題材をより卑近なものへと変容させ、そのうえで、季の句は、季語による季節の決定から、季語を含む一句の言い回しによるものへと変化する。「かるみ」への志向が指摘される第六期になると、こうした一句全体での季節感の表現が目立ち、

殊に人事を含む言い回しとその季節表現のパターンと見ることでできる。それがやがて、第七期に景気句にまで広げられ、最晩年の第八期には、景物や時節の季節らしさを一句全体で表現する景気句の典型へと変化する。一句の表現も、雅語的表現から、特に第七期以降、口語（俗語）的表現が目立つようになる。冒頭でもふれたが、季語は日本文学と日本文化のエッセンスの蓄積である。それゆえに、和歌・連歌以来の詩歌の伝統を背景に生成された語は、雅語表現に他ならない。それが、卑近な素材と時節との関わりに着目し、詠み込まれたことによって、俗語表現や一句の言い回し、季語を組み合わせたたり、言葉を重ねたりしながら一句全体での季節感の構築が可能になったのであろう。

連句季語には、このように発句にはない制約やルールのもと、連句に適した選択がなされ、その季語の性格が句に活かされている。それは殊に、四季名や「月次の月」を詠み込んだ句において特徴的であった。連句における四季名の多用は、そもそもは「投げ込み」の手法と同手法であったはずが、芭蕉連句にあつては、人事世界や日常生活の中に季節を見いだすための方法の一つとして利用されている。その結果、季語が多様化していく。語を組み合わせたり、共に詠み込むことによって、季の句の可能性を拓いていく方法であると評せよう。結局、芭蕉連句における季語パリエーションは、詠出対象の拡大と新たな季語の発見、「季重なり」の現象の中に見る季語の本季と現実世界でのズレを持ち込むことで表現されたリアリティある季節感、一句にまで拡大した季の句におけるあらたな季節感表現、付合世界における季移りを利用した新しい季節感の造形など、種々の季の句における表現の中にある。複数の作者が存在する連句世界にあつてこそ、読者を巻き込んだので実感ある季節表現が求められたのであろう。芭蕉たちの季節の句に対する意識がここに

ある。つまりは、芭蕉連句における季の句のあり方が、連句季語の特殊性と傾向を生み出したといえよう。

芭蕉連句における連句季語は、こうしてあらゆる事象にいたるまで季節の表現の一部として取り込みつつ、増幅されていたのである。芭蕉の連句は、より卑近な生活感覚を背景として、日常用いられる言葉を文学世界に取り込もうとする。これまで見てきた、季語の一句としての表現や工夫は、その意識のあらわれとして連句季語に特殊性をもたらししていたのである。『去来抄』には、季語に関する芭蕉の言として次のような著名な一節がある。

魯町曰く「竹植うる日は、古来より季にや」。去来曰く「覚悟せず。先師の句にて初めて見侍る。古来の季ならずとも、季に然るべき物あらば撰び用ゆべし。先師、季節の一つも探り出したらんは、後世によき賜となり。塩かきの夜も、古来の季節かしらずといへども、五月晦日なれば、夏季に定めて、可南が句に沙汰し侍るなり」。

連句季語と季の句との関係は、いわば、季語となりえない人々の生活感や風俗などに、季を見いだそうとした結果である。『去来抄』に見るように「後世によき賜」とすべく「季節の一つも探り出」そうとした芭蕉の姿勢を、わたしたちたちにありありと伝えてくるのである。

## 注

(1) 発句の季語総体と芭蕉同座の五一連句における季語に関する調査報告からなる東聖子氏の『蕉風俳諧における〈季語・季題〉の研究』(2003年、明治書院)ほか、季題・季語研究は発句を中心に歳時記研究の中で取り上げられている(尾形佑『俳句と俳諧』

1983年、角川書店や山本健吉『最新俳句歳時記』新年解説、1983年第二版、文芸春秋など。近年では、発句を季題別に配列し解説を付した雲英末雄・佐藤勝明校注『芭蕉全発句』（2010年、角川ソフィア文庫）などによって発句の季語の様相が見える。

- (2) 以下、芭蕉の一座した連句を「芭蕉連句」とし、とくに貞享元年『冬の日』以降の連句を「貞享以降」の芭蕉連句として考察の中心におき、それ以前の連句を「貞享以前」と区別する。なお、とくに断らずに「芭蕉連句」と呼称した場合には、この貞享元年『冬の日』以降の芭蕉連句を指すものとする。

- (3) 拙稿「芭蕉連句季移り考」〔『連歌俳諧研究』115号、平成20年9月、俳文学会〕参照。

- (4) 『俳諧御傘』（慶安四年刊）には「露とく」とは三句「去」「ふり物」には二句「去」とあるが、『俳諧無言抄』（延宝二年刊）には、「露更て、夜分也。深に二句去也。夜の字入すして、夜の更たるさま也。露凍るは霜の事也。此故に冬也。露涼しは夏也。露時雨は秋也。露霜は冬也」とあって、特に句去の規定は見られなくなる。そのため、一巻中に繰り返し利用することが可能であった。

- (5) 季の式目上、夏・冬の句には制約が小さい。句数は一から三句と少くなく、句去も同季三句去のため回数を詠むことは可能である。だが、実際に芭蕉連句において、冬は平均で二・六句、夏は平均で二・四句しか詠まれていない。夏季あるいは冬季は一巻中に一度も出されないこともあるくらいである。このような実態を考えると、冬を本季に持つ「雪」が連句においてこれほど多く詠み込まれているのは大変興味深く、単に伝統的な季題であること以上の意味があると考えられる。なお、こうした「雪」の詠み込み方の詳細については別稿に譲る。

- (6) なお、これらは、談林俳諧での付句の発想の仕方（あしらい）とも関わってくる問題であるが、それについては別に論じたい。

- (7) 注3参照。

- (8) 三季移りは、「秣おふ」歌仙・「風流の」歌仙・「御尋に」歌仙・「温海山」歌仙の四例。「すずしさを」歌仙は四季移りの例である。詳細は拙稿「芭蕉連句における三季移り」を参照されたい。

- (9) 『真跡添削草稿』では、句は同型であるが、「そぐやうに長刀坂の冬の風 馬寛」（元禄七年春「八九間」その二歌仙、名ウ1）とあって、作者名が異なる。

- (10) 「野山の色も変わり、風も身にしむようになり、ものさみしくあはれなる体、秋の本意なり」（『連歌式目書 至宝抄』天正十四年）。

- (11) 一条兼良著、北村季吟注『増補和歌題林抄』。底本は宝永三年刊の早稲田大学図書館蔵本による。漢字は適宜当て変え、句読点を補った。

#### 【集計にあたって】

・ 今回の調査対象の連句は、表六句以上の長さのものに限っている。貞享以前二九卷一八六八句、『冬の日』以降一七九卷五七二九句である。発句は、全九八三句。芭蕉の全発句で存擬・誤伝のものは含まないものとする。成立年次は考慮にはいれてあるが、特に貞享以前・以後に關しては区別していない。これは、あくまで芭蕉連句の季語との比較において、その対象となる季語の母体数を連句に近づけるためである。

・ 季の認定にあたっては『校本芭蕉全集』（連句編、昭和63）平成3年、富士見書房）と阿部正美『芭蕉連句抄』（昭和51）61年、明治書院）ほか、島居清『芭蕉連句全註解』（昭和55年、桜楓社）上野洋三・白石梯三校注『芭蕉七部集』（新日本古典文学大系70、平成2年、岩波書店）など諸注を参照している。本稿の調査に際して、連句の季を見直し、諸注で季語が相違する場合や問題のある場合は、式目や連句の季語の扱いなどをふまえ、近世初期の季寄せ歳時記類を参照しつつ季語を認定した。一句に二つ以上の季語が含まれている場合はそのすべてを季語として調査結果に加えるが、一句の季語に關しては式目に抵触しない範囲で四季に判別し認定してある。問題のあるものについては、一部、



拙稿「芭蕉連句の季語と季感試論」(『近世文藝』第90号、平成21年7月20日、日本近世文學會)中に取り上げたが、それ以外のものについては検討結果を改めて公表する用意がある。なお、歌仙と百韻など形式の違いに関しては、考慮には入れているが特に区別することなく考察した。季の式目は、歌仙・百韻共に、春秋の句数は三〜五句、同季五句去であって、一折につき表に二句、裏に二句(都合四句)ずつ多い百韻の形式は、その分歌仙よりも季の展開に余裕がある。そのため、貞享以前の連句において、季の割合が低い要因の一つは、百韻形式の連句が多いためである。ちなみに、貞享元年以降、歌仙形式が一般化し百韻形式の数が著しく減少する。百韻形式における季句の割合の平均は五二・四%(これに、貞門・談林時代の芭蕉同座連句を含めると、五〇%弱ほど)である。

本文の引用表記は発句・連句ともに概ね『新編芭蕉大成』によるものとする。ただし、一部、古典俳文学大系や『芭蕉連句抄』『校本芭蕉全集』など他の注釈書類により補ったものもある。

発句の季語については、右の要領に従い、適宜歳時記類を参照しながら、季語の集計を行っている。連句での扱いと比較する都合上、発句に關しても連句季語の形態に合わせた形で分類してある。本稿の考察の趣旨にそぐわないため省いたが、本稿第四章の中でもふれた通り、個別に考察が必要なものは、別項に譲るものとする。

なお、連句における季語の出現回数に関して、本調査では前句を考慮に入れず、数の増減を計ったわけだが、そもそも連句では前句からの発想によって付句が付けられていくので、前句次第で付句の季語がある程度想定される可能性がある。殊に、貞門談林時代の付句の発想は、そうした付合語によるものが多く見られるわけであるので、今回の考察では別に調査し参考に留めてある。付句の季語とは、句数の規定から付句の季が規定されることがあり、また、その一方で去嫌によって使用できる言葉が制限されている。『去来抄』に記されたように支考が「付句は一句に一句なり」と言ったのも、こうした場の状況を言ったものである。試みに、集計上位に挙げられた季語について、その前句を

見てみたが特徴的に用いられた語などは見られない。つまり、付句に詠み込まれた季語は、去来がいうように前句に制限されながらも、多様な可能性の中から選び取られてきたものであって、付句の季語の出現回数はやはり連句における季語への何らかの嗜好のあらわれとして問題としてよいものと考ええる。





貞享以前

寛文・延宝 537		天和・貞享元年 327				
月	80 翁草	1 芭蕉	1 月	40 河骨	1 霧	1
秋	50 下紅葉	1 梅・鶯	1 花	27 火桶・寒し	1 鳴子	1
花	46 下萌	1 肌寒	1 秋	14 花桜	1 茂み	1
露	40 夏・彼岸	1 氷ながる	1 露	13 蚊	1 茂り	1
春	35 夏花	1 氷る	1 春	11 蛙	1 木陰	1
霞	18 河豚汁	1 氷解く	1 雪	7 葛の葉	1 木槿	1
雁	10 花の雪	1 浮き草	1 霜	7 寒食	1 餅	1
雪	10 花紅葉	1 風冴ゆ	1 すすき	5 雁(稲負鳥)	1 夜長	1
時雨	9 蛙子	1 仏生会	1 鯉	4 鬼灯・灯笼	1 野分(暮風)	1
霧	9 寒さ	1 北斗を祭る	1 時雨	4 蟻	1 柚子	1
ほととぎす	6 寒し(月)	1 盆	1 朝顔	4 去年	1 夕顔	1
鶯	5 款冬	1 埋み火	1 萩	4 去年の雪	1 踊り	1
虫	5 汗(月)	1 木の実	1 柳	4 鏡割り	1 踊る	1
紅葉	4 帰る鳥	1 木の葉	1 こがらし	3 串柿飾る	1 陽炎	1
青柳	4 菊	1 こがらし	1 ほととぎす	3 継尾(鷹)	1 落ち葉	1
藤	4 菊・雁	1 柳	1 燕	3 月・花	1 炉	1
梅	4 橘(月)	1 夕顔	1 霞	3 胡瓜	1 臙	1
蛙	3 金柑	1 楊枝	1 清水	3 梧桐	1 臙闇・月	1
帰雁	3 空蟬	1 落ち葉	1 西瓜	3 歳暮(年の夜)	1 蓼(月)	1
砧	3 経よむ鳥(鶯)	1 律のしらべ	1 かげろふ	2 冴ゆ	1 蝙蝠	1
蛭	3 茎漬け	1 竜田の錦(紅葉)	1 こおろぎ	2 山吹	1 躑躅	1
紅葉散る	3 検見	1 涼し	1 夏	2 残雪	1 寒	1
残雪	3 胡蝶・鶯	1 冷	1 海苔	2 紙帳	1 あられ	1
色葉	3 紅葉・花	1 蓮・涼し	1 葛	2 歯朶刈	1 鱈	1
雪解け	3 佐保姫	1 蓮池	1 寒し	2 鹿		
すすき	3 寒かえる	1 蕨	1 菊	2 柴紅葉		
鶉	3 冴える	1 盂蘭盆	1 砧	2 捨扇		
きりぎりす	2 桜	1 礮清水	1 蛭	2 若木		
荻	2 山吹	1 蓼酢	1 紅葉	2 松茸		
花すすき	2 山眠る	1 蝙蝠	1 歳暮	2 菖蒲		
霞む	2 鹿		1 桜	2 織り姫		
鴨	2 七夕		1 鳴	2 真桑		
月・花	2 若葉		1 大根	2 真桑瓜		
歳暮	2 秋草		1 藤	2 凄し		
山の色	2 春の夜		1 芭蕉	2 清水・麦		
山雀	2 初嵐		1 藪入り	2 青萩		
残る暑さ	2 小殿原		1 有明月	2 切灯笼		
小男鹿	2 菖蒲茸く		1 蘭	2 雪(月)		
色替ぬ松	2 心太		1 蜩	2 蟬		
新蕎麦	2 真葛原		1 (月の桂)	1 早苗		
青嵐	2 身にしむ		1 (篠の宿の意)	1 草萌		
千鳥	2 雛		1 いぐち	1 霜を待つ		
草萌	2 星の通ひ路		1 かがり火	1 大年		
霜	2 節振舞		1 カジカ	1 凧		
如月	2 雪崩		1 風薫る	1 淡雪		
蚤	2 扇		1 雉子	1 団炭		
萩	2 早田		1 さくら子	1 蝶		
薄氷流る	2 早蕨		1 さび鮎	1 鳥の巢		
尾花	2 草の色		1 しぼむ滝	1 田螺		
有明月	2 霜枯れ		1 すさまじ	1 冬		
露時雨	2 大ぶく		1 すす掃き	1 冬子		
あられ	2 大根		1 とくさ	1 凍ゆ		
(ほととぎす)	1 鷹の餌ごひ		1 ところ売り	1 日傘		
(秋)	1 茸		1 ひややか	1 如月		
あかがり	1 凧		1 ほじろ	1 年忘れ		
あかがり(月)	1 短夜		1 ぼた	1 蚤		
あけて今朝	1 虫(松虫・鈴虫)		1 みみず	1 破魔矢		
かけ踊り	1 潮干		1 やや寒	1 梅の実		
きそはじめ	1 長閑		1 ゆずりはの宿	1 白魚		
さほ姫・花	1 長月		1 栗	1 すすき・雁		
しめぢ・初茸	1 鳥の巢立ち		1 粟・稗・蓼	1 尾花		
すもも・山もも	1 薦		1 杏	1 終		
ながるる年(歳暮)	1 都鳥		1 衣替え	1 氷る		
のどか	1 土筆		1 芋	1 風和らぐ		
めじろ	1 土用		1 卵の実	1 蔞の葉		
芦	1 冬		1 鶯	1 米刈る		
芦の穂	1 東風		1 牡丹	1 穂長の宵		
捨	1 桃の酒		1 牡蠣	1 麻がら		
一葉散る	1 湯婆		1 夏や昨日	1 麻の葉		
稲色になる	1 年玉		1 夏隣	1 埋み火		



